
ドラッヘ大陸譚訪顛末記

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラッヘ大陸譚訪顛末記

【Nコード】

N3724N

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

一乃蓮ルウは、ごくごく平凡な男子校生。ある日、自覚なしに中世ヨーロッパ風の異世界へトリップしてしまう。元の世界に帰るために、世界中を放浪する。ルウは、無事に元の世界に帰れるのか？！……世界を繋ぐとびらをみつけるトリップファンタジー。巻き込まれ型の異世界トリップ。

登場人物一覧（前書き）

登場人物が多くなってきましたので、一覧にしました。

テンプレート

名前／年齢／性別／出身国／特記事項

登場人物一覧

主人公と旅の仲間たち

一乃蓮 ルウ／18歳／男／日本／人々が恐れおののくほどの超絶美形。サン格拉斯必須

ロリス／18歳／男／ジレスタ王国／トレジャーハンター

ツナ／0歳／男／砂漠／砂漠魚。ルウの懐が大好き

アルシェーン・バナディウス／17歳／女／グラン帝国／自称天才魔術師

ユーリス・プレトリア／18歳／女／ジリン王国／司祭

メイヒュー王国

シェリダン・グリフィン／24歳／男／出身地不明／空賊

リサ・ロゼッタ／15歳／女／メイヒュー王国マギの村／魔法剣士

マーティン・デ・メイヒュー／25歳／男／メイヒュー王国／メイヒュー王国国王

神を恐れぬ男 1

?? つまり、何かあ?！ 俺の酒が飲めねえってのか!!

?? 俺は向かい合って座る人のよさそうな顔立ちをした細身の男
- - - - 俺の相棒にして盗賊であるロリスを見て叫びたくなっ
た。実際にやったのは中ジョッキいっぱいに入っているビールを木
製のテーブルの上にドンツと勢いよく置いたことだ。結構大きい鈍
い音がしたけれど周りは酒によって陽気に歌っているやつらばかり
なので、こちらのことはまったく気にしていない。俺は手にかかっ
たビールをもったいないと思いながらジョッキを口に運んで一口の
み干した。

? 俺が何でこんなに機嫌が悪いかというと、ある情報が手に入りそ
うだったのに寸でのところでおしゃかになったからだ。

?? くそっ今思い出しても肚がたつ。

?? そう、荒れ狂っている俺をロリスが半分あきれて、半分諦め
たかのような表情をして遠巻きに俺を見つめている。

?? 誰だって、俺みたいに荒れなくなるってもんだ。

? - - - - 元の世界に帰る方法が消えちゃったんだから。

?? 俺は、一乃蓮ルウ。名前がカタカナなのは俺がドイツ人と曰
本人とのダブルだからだ。十五歳だった俺は当然近くの高校に通っ

ているごく普通の男子高校生だった。得意な科目は数学と歴史。苦手な科目は家庭科と国語。部活はバトミントン部。バイトは近くのコンビニでレジうち。この判に押したかのような普通の高校生だった俺は、何故か気がついたら俺のまったく知らない、明らかに地球上ではない世界にきていた。思い当たるきつかけはまったくない。普通、なんかしらの衝撃を受けて異世界に飛んで行くというのがこういうファンタジー小説の定番だろう。だけど、俺にはそんなものが感じられなかった。いつものように万年床になっている俺のベッドに、明日は誰かに国語のノート写させてもらわないとな、と思いつながら軽くダイブしながら寝転がりそのまま眠った。？

?? 気がついたら、見たこともない質素な天井。天井に電球がない。はっと起きて部屋を見渡せばなんかの映画のセットですか？と聞きたくなるような中世風の装飾のない質素な天井にぴったりな地味な部屋のベッドの上に俺は眠っていたのだ。？
?? それがたまたま今、俺の相棒をやっているロリスの家で、道で行き倒れている俺を助けてくれたようだった。最初、夢かと思ったこの世界もいつまで経っても夢から覚めないのです、現実として受け入れるしかなかった。

?? そんなことになってから三年。俺は十八歳になっていた。

?? ようやく見つけた元の世界に戻るための情報だったのに……。大体、こういう物語って召喚された人間は「勇者」か「賢者」か。最近の流行では「魔王」ってのが定番だろう？ だけど、俺にはある日突然「今日からあなたは。です」と言ってくれる人は現れなかった。もしかして、俺って勝手に紛れ込んで着ちゃったおマヌケさんなのか？ と最近思い始めた。

?? だって、俺がヒーローになる要素って言うのは皆無なんだ。

バトミントンをやってたおかげで運動神経はいいほうだろうけど、馬には乗れなかったし、剣を使えないから身を守ることもしできない。だからといって俺の知識は学校の試験には役立つけれどこういうサバイバルには何の効力も発揮しない。

?? 俺って、何を勉強してきたんだって頭を抱えて部屋の隅での字を書くほど落ち込ませる。

「ま、まあ、次があるよ。落ち込むなってルウ」

??? ロリスがこのまま放っておけないと思ってくれたのか、俺に優しい言葉を投げかける。ロリスという名前からして美少女のようだが実際は男だ。これが、女の子からの励ましの言葉だったら心底嬉しいんだけどね。

???

?? そういうことぐらいうまくいつてほしいんだけど、ここでもダメみたいだ。

「それに、お前美人さん顔だから怒るとすっごい迫力なんだわ……」

?? 俺のこの世界がおかしいと思う点その一。美的感覚がおかしい。どうもロリスに言わせると俺の容姿は男も女も魅力を感じるほど整った顔立ちをしていて、いわゆる「美形」「美人」と分類されてもおかしくはない、いや、むしろ分類しろ、という見本のような顔立ちらしい。俺は確かにダブルだから準日本人的な顔立ちをした人たちに比べたら顔がいい事ぐらい知っている。

?? 『外国人みたいで素敵』と女の子から言われたことは何度かある。というか、外国人みたいってまた微妙な表現だよな。日本以外の国に行ったら俺らは外国人だっつーの。一部の女の子に『最近

人気が出てきたハリウッドの若手俳優に似てなくもないかも』、と言われたこともある。

?? それって、似てないんじゃないの？ と俺は心の中でツッコミ入れるのを忘ればしなかった。表面的には、うろたえつつ『ありがとうよ』というのが精一杯の俺。？

?? そんな俺が、超絶美形なわけあるか~~~~~っ

?? しかし、こつちの世界に来てからというものの俺の顔を見るなり、ぱくつと遥か彼方の世界を見つめているような表情になって俺の質問にろくに答えてくれない男女多数発生。その原因が俺の顔にあるなんて知った日には喜んでいいのか絶望すればいいのか、分かっていなかった。それ以来、俺は顔の一部を隠すようにサングラスをかけていた。

?? 俺の顔は指定公害かって言うんだ！

「あんたもいい加減、男ならうじうじするのやめなさいよ！ 儲かったんだからいいじゃない!!」

?? 俺のことをガラスをこすったときのようなキンキン声で叱り付けたのは、パーティを組んでいる仲間の魔法使い、アルシエーンだ。

「おまえなあ、アレがどれだけ重要だったか知らないからそんなこというんだ」

「あーんな紙ッ切れ、どこが重要だって言つのよ」

?? ああいえばこういう、口から先に生まれてきただとツツコ
ミたくなるような女だ。

???

?? 髪の毛を腰のあたりまで伸ばしていて、色は漆黒の闇の色。
瞳はその情熱的な性格を表しているのか真紅の色をしている。俺か
ら見ればちよつとつり目の美人、という顔立ちで今は、怒りのため
に頬を紅潮させていた。魔法使い、と名乗っているくせに使える
魔法は炎の魔法だけ、というヘタレ魔法使いだがそんなことはどこ
かに吹き飛ばしたのかいつも自信に満ち溢れている。

「それは……」

?? 俺は口ごもった。アルシエーンには俺がことは違う世界か
らきたことを言っていない。だって、仮に俺がこの世界の住人で、
目の前にいる奴から「違う世界から来たんだ」とか告白されたら正
気を疑うね。まず、俺ならこう言う。「夢の見すぎだ」

「ほーら、ごらん。重要だったらちゃんと説明したらいいでしょ」

?? くっそあ。この女……。今に見てろよ。

「アルシエーン……ルウもそこら辺にして置いてくださいませ。注
目を浴びてますわ」

?? アルシエーンは腰に手を当てて仁王立ちして、半分高笑いし
ながら話しているものだから、注目度は極端にアップする。極めつ
け、顔だけはいい。美女が酒場で高笑い。注目するなって方が無理
だ。

「ユーリスだって、こんなやつ庇うことないのよ。剣さえ振り回し

ていれば良いと思っている、愚かな剣士なんだから」

?? 剣士なんだから、剣を振り回さないでどうするっ?! と俺は思うのだが、俺は自分の剣術があまりうまくないことに自覚があるのでぐうの音も出ない。俺とアルシェーンの仲裁をしてくれたユリスも思うところがあるらしく、困ったような表情で俺の顔を見た後はあ、とため息をついた。

?? ユリスはアルシェーンとは正反対のタイプで、物静かで物腰は上品。顔立ちは優しい面差しで、一度だけ、教会で見たことあるマリア像のような柔和な笑顔を見せてくれる。髪の毛の色はプラチナブロンドで、瞳の色は晴れた空の色をしていた。まるで女神のようだったら大げさかもしれないけれど、神様に仕える神官だから浮世離れしているのかもしれない。

「とにかくですね。次はどこへ行きますか? 当分の間は食には困らないでしょうけど、ここでもうしても仕方ありません」

「そうだな。ここらでひとつちゃんと人助けでもやってみる?」

「人助けえ?」

?? 俺はロリスの提案に不審そうに聞き返した。このパーティーを組んでから今まで俺たちがやってきたのは、酒場や宿場でダンジョンやお宝の噂話を聞きだし、実際にそれを取りにいくといった、トレジャーハンティングといわれることしかやっていない。ちゃんと宝があつて儲けが出るといふのはなかなか少ないけれど、やらなによりかはまし、という結果が最近出るようになってきた。

「……ここで、有力者にコネクションを築いておけばお宝の情報も、

手に入りやすいと思うよ」

?? 乗った！ と俺とアルシエーンが食らいつく。俺は有力者なら知る機会もあるかもしれない珍しい情報である『世界を渡る方法』が知れたかったし、アルシエーンは文字通り金銭儲けと受け取ったのだろう。

「最近、このポートフィリオでは誘拐事件が多発しているらしいんだ。犯人を捕まえたものに賞金一万ゴールド、有力情報を提供したものに三百ゴールド支払われるというお触書があるんだ」

「賞金提供者は誰？」

「国王陛下の名前さ」

?? ロリスがにやり、と笑った。こいつ、こういうところには抜け目がない。

「国王陛下自らが下々の誘拐事件について調査せよっていう命令出すのか？ この国は」

?? 信じらんねえ、と俺が言うとロリスは肩をすくめる。

「今回が初めてだよ。どうやら誘拐されているのは下々のものだけじゃなくて、警備が厳重なはずの貴族の子息や令嬢なんかが含まれているようだからね」

?? 貧富の差を問わず誘拐か。なんだか嫌な予感がある。

?? 誘拐、というからにはその誘拐した人物に何か価値があるか、

もしくは誘拐されたものの家に価値があるかのどちらかということが多い。天才科学者なんかは、誘拐して悪事に利用されそうだけれど攫われたのは、天才とは縁遠い一般人という話だし、家に価値を見出しているのなら貴族の坊ちゃん一人ぐらい攫っておけば、遊んで生活できるだけのお金ぐらい身代金要求ができるだろう？

?? 現在の地球だと、誘拐して身代金要求というのははつきりいって成功させる確率は低い。それだけ科学捜査が発達しているということだ。ドラマの見すぎでみんな、通話時間を短くすれば逆探知されないとも思っているようだけど、そんなわけあるか。

?? だけれど、ここは文明的には中世のヨーロッパという程度だ。身代金要求は楽勝に成功させれそうだ。それでも、俺は気になることがある。この世界の文明は中世のヨーロッパ程度のレベルといって間違いない。だが、それを上回る科学技術をたまにお目にかかることがある。空を飛ぶ飛行艇や、金属製のダンジョンがあることだ。それに、通信機器が発達していてかなり値は張るが、携帯電話のようなものだって存在している。ピアスとして売られているそれは、同じものを持っているもの同志の遠距離通話ができるようになってる。そのくせ、生活は中世レベル。アンバランスもいいところだ。

?? ロリスにいわせたら、この世界にはかつて『楽園』ともいうべき平和で豊かな国があったのだが、一夜にしてそれが滅んでしまったらしい。その上に今の国があるんだとか。いわゆる、こういう発達しすぎているものはロストテクノロジーのおかげらしい。だが、その技術を応用しようという考えにもまだたどり着けないほど、テクノロジーのレベルが低いようだ？

?? 魔法が発達しているから、テクノロジーが発展しないんじゃないか、と俺なんか思うけど。

「いろんな奴らが事件解決にあつちこつち行ってるみたいだけど、全然解決できてないみたいなんだ」

「なんで解決できないんだよ？ 犯人の足取りぐらい、つかめるだろ？ 仮にお貴族様を誘拐してるなら、家臣たちが黙っちゃいないはずだ」

「もちろん、黙っちゃいなかったんだけど……ある地点を境にぷつぷつりと足取りが途切れてしまうんだ」

「？？ そりゃ、怪しい。あからさまにその付近に本拠地があります、と言ってるようなものだ。」

「魔法で結界を張ってるんじゃないのかしら？ だとしたら、魔法使い一人いれば、そんなの破壊できるわよ」

「誰一人破壊できてないから、未解決なんだよ」

「？？ ロリスは楽しそうにニコニコと微笑を浮かべて俺たちを見つめている。なんか、こいつの手のひらでコロコロ転がされている気がしなくもないが、そんな不思議現象が起きてるなら仕掛けつてのを見てやりたいじゃないか。」

「決まりだね。行き先はメイヒュー王国の西の果て国境沿いだ」

「こつから、馬で三日の距離か」

「？？ 馬には乗れるようになったけど、長時間乗っているのは嫌なんだよな。尻が痛いから。大体、魔法だってあるのにこの世界は交

通手段がほとんど発展していない。馬か馬車か徒歩だ。おかしなテクノロジーが残っているのなら燃料で動く鉄の馬車ぐらいあってもいいだろうに。

「どうする？ ルウは馬車で行く？」

「?? ロリスは俺を見ながら、楽しそうに微笑んでる。俺が移動のときに落馬したことをまだからかいの種にしているのだ。あれは時効だ、事故だと言っているのだがロリスは聞き入れてくれない。俺は乗馬なんてしなくても生活できるところに住んでいたんだ。」

「?? なのにロリスときたら相当俺の慌てた様子がおかしかったよ
うで、当分このネタでからかい続けるようだ。俺は新しい話題を提
供しないように気を引き締めた。」

神を恐れぬ男 1 (後書き)

10/8 改行などを変更。
-
-
*
-
*
-
*
*
-
-
-

神を恐れぬ男 2

?? うーん……もう、起きなきゃだめなんだろうか。

?? 朝日が燦々と俺の顔に降り注いで強制的に目覚めさせようとしている。太陽の日差しもなんだか一段と強くなってきたようだ。

?? そういえば、もう初夏だっけと半分起きてるんだか、寝てるんだか分からない頭で考えた。

「おら、起きろよ」

?? 先に目覚めているロリスが、俺を起こす。普通、寝ている誰かを起こすなら言葉での呼びかけ、次に体をゆする、最後に布団をはぐだと思っただが、ロリスは容赦がない。

?? いきなりまどろみをむさぼっている俺の背中を蹴り飛ばしてベッドから俺を床へとダイブさせる。

「……もっと優しく起こせといつも頼んでるだろう」

「だったら、呼びかけた時点で起きろよな」

?? ロリスは結構前からちゃんと呼びかけているのだが、まったく起きる気配がないので仕方がなく俺を蹴り落としてるんだそうだ。

本当だろうな？

俺としては、けり落としてるところしか意識がないわけだから、

いきなり蹴られていると思うっているんだ。だけど、そこを追求するとロリスがなんだか黒い微笑を浮かべて『疑ってるの?』と聞いてくるから始末が悪い。

「おはよ」

?? 隣部屋は部屋の中でつながっていて、アルシエーンはノックもせずに部屋の扉を開けた。俺は着替えるためにシャツを脱いで上半身素っ裸である。

?? アルシエーンは俺の姿を見るなり、まるで覗きにでもあったかのような甲高い悲鳴を上げて「バカバカルウのバカ」と顔を真っ赤にして叫びながら扉を閉めた。

「……だったら、ノックしてドアあけるよな」

?? なんて、俺が痴漢みたいな扱いをされなきゃならないんだ。むしろ覗かれて俺の玉のような美肌を見られちゃったんだぞ。被害者は俺だ。

「さっさと飯食いに行こうぜ」

???トレジャーハンター様は空腹のようで、俺とアルシエーンの一瞬の攻防なんて気にも留めてない。

「野郎の裸なんて見ても面白くもねえから、はやくシャツを着ろ」

?? 俺が扉の向こうにいるはずのアルシエーンに向かって、ハリウッド映画でよくやる『地獄へ落ちろ』という指のサインをしているとロリスが俺の着る予定のシャツを投げつけた。俺の頭に見事に

それは直撃して、顔の前面がシャツで遮断される。俺は視界をふさいでいるシャツをつまみ、袖を通した。皮冑を身につけ、枕許に立てかけておいた愛用の剣を腰のベルトに取り付ける。

?? この世界に来て、護身用として覚えたのは剣術だ。ロリスはトレジャーハンターの家柄で家族や親戚、一族の者たちが全員トレジャーハンターというとてもない家だ。そのおかげで、俺はお世話になっている間、ロリスの親戚たちに護身術を教えてもらった。いろんな武器を使える中で選んだのはオーソドックスな剣だったのだけれど、あんまりしっくりこない。

?? もうちょつと使いやすいと感じる武器をちゃんと選んでおいたほうがよかつたんだろうか。

?? いざ実践となるとどうも無駄に剣を振ってしまう。俺が扱やすい細長いものといえば、中学のときから続けてきたバトミントンのラケットぐらいだ。

?? ああいう握り方をする武器ってないのかな？ 棍棒……はちよつと違うし。台所のフライパンとかしっくりきそうだ。でも、フライパンでモンスターを殴り倒すの？ ね？ それってやっぱり反則だよな？

?? 俺はすっかり伸びてしまった自分の髪を後ろでひとつに束ねながら部屋を出た。

?? ここは二階は宿屋、一階食堂になっている。俺たちは下の階へ降りて行くと、食欲を刺激するいい匂いがしてきた。もうすでに朝食を食べている客たちがいてそちらから漂ってくるようだ。

?? 看板娘であるリナが小さい体でくると元気に動きながら
お店を切り盛りしている。

?? 俺たちは、かりかりのトーストと、トマトとじゃがいものス
ープとサラダを頼んだ。このトマトとじゃがいものスープは絶品
だと思う。トマトの酸味が食欲のわかない朝でも食べれるのだ。？

?? リナが出来上がった料理を次々と俺たちのテーブルの上に乗
せる。今日のサラダはジャガイモのサラダのようだ。ジャガイモだ
けではなくて、レタスをお皿の上に敷き、その上にゆでたジャガイ
モ やきゅうりが乗せられていた。飾りつけはチャイブだ。黒パン
はかりかりのトーストにされて籠のうえにいい匂いをさせて並んで
いる。そのとなりにはバターとジャムの小瓶が置かれている。典
型的な朝食の出来上がりだ。

?? 俺は木製のスプーンでスープを掬い口へと運んだ。

?? うまい。

「メイヒュー王国の西の国境までは馬で移動するとして……その後
の目的の場所はどうなってるんだ？」

?? 俺の問いかけに、ロリスはかじっていたパンを皿に戻した。

「何もないらしい」

「は？」

「メイヒューの西の国境はロンデスガルドの森だ。森の真ん中あた
りにぽっかりと木の生えていない円形の穴が開いているらしい」

「穴、だけ……か？」

「穴だけだ。だが、近づいても入れない」

「魔法で入れないようにバリアでも張ってるのかしら？」

「宮廷魔術師クラスの魔法使いが何人も挑戦したけど、その魔法を解呪することはできなかったようだね」

「ちょ……そんなの、どうすんだよ？」

「？？ 俺たちは、冒険者としては初心者マークもいいところだ。そんな大事ムリに決まってる。」

「魔法はダメかもしれないけれど、神聖魔法ならいけるかもしれないだろう？」

「？？ ロリスは黙々と食事をしているユーリスに視線を向けた。そうだ、ユーリスは神聖魔法が本当に使うことができる数少ない聖職者だ。」

「？？ 神聖魔法というのは本当に使うのが難しらしく、どんなに修行を重ねても傷を癒す魔法や、身体能力を引き上げる魔法は使えないことが多い。事実、神様に仕える聖職者たちの大半は教えを伝える伝道師でしかないし、高位聖職者たちも伝道師から選出されるのがほとんどだ。そんなに珍しい神聖魔法 を使える聖職者をよくいつ死ぬか分からない冒険者なんて稼業を教会が許したのかということが、俺には分からない。」

?? ユーリスに聞いてもはぐらかされるだけだった。ユーリスは教会からの嫉妬でそのような扱いを受けているのかもしれない。よくあることだ。

「神聖魔法を使えるもの自体少ないから、解除に挑戦させたはずはないということだな？」

「そういうことだ」

?? 俺の回答に満足そうにトレジャーハンター様は頷いた。なんだって、こいつはこんなに偉そうに見えてしまうのだろう。

?? 食事が終わったので、部屋に戻り出発の準備をした。二日分の宿代を払い、リナからお弁当を受け取る。特別に作ってもらっている弁当だが、これが結構おいしい。

?? また、次にココに戻れたときには宿に泊まろうと心の中で誓って、今朝買ってきた馬に乗った。

?? 空には太陽が輝き、白い雲がたなびいている。ポートフィリオの町を抜けるとそこには中原が広がっている。地平線の果てには建物すら見えなくて、ただ一本の道のみが西へと向かっている。この街道沿いに三日行けば国境にたどり着く。国境までは比較的平坦な道が続くので馬での旅はしやすい。

「今日はよく晴れてるわね。向こうにシリエント山がみえるわ」

?? 南側に広がる海の向こうにわずかに山型の島が見える。あれはグラン帝国で一番高い山のシリエント山だ。よく晴れた日ではないと見えない。帝国出身のアルシェーンが懐かしそうに目を細めた。

「お前、家には帰ってないのかよ」

?? ホームシックにでもかかったかのような泣き出しそうな表情をしたアルシエーンをみて、俺は思わず口からついえた。

「帰ってないわ」

「なんで？」

?? 俺はできることなら帰りたい。時々思うんだ、この世界はすべて俺の夢の中のものではないのかと。

「帰れない事情があるのよ!!」

?? アルシエーンはほほを紅くして叫んだ。大方、家出同然で家を出てきたからいまさら家族に顔向けできないとかそんな事情だろう。アルシエーンはグラン帝国の貴族の娘だとかつて聞いたことがあった。

「……あんたの出身はどこよ」

?? アルシエーンは急に大きい声を出したことに恥じたのか、伏目がちに俺に尋ねる。

?? 今まで俺の個人的な情報なんてどうでもいいと思っていたようだったのに珍しいこともあるもんだ。だが、その質問は俺にとつてはつらい。

「故郷は無い」

「え？」

「故郷は無い……そういうことだ」

「?? どこをどう行っただって、世界の果てまで行っても俺の住んでいた世界には帰れない。ただ何気なく毎日通っていた学校も、よくよったコンビニも俺にはすべてが遠い。」

「ごめんなさい」

「なぜ、謝るんだ？」

「だって……戦争は絶えないし、故郷をなくしてしまった人がたくさんいることぐらい、私だって分かっていたつもりだわ」

「?? アルシエーンは誤解をしてくれたらしい。俺の住んでいた町が戦争で廃墟になったと思ってているようだ。俺はいままでそういうのを目撃はしていないけれど、グラン帝国出身のアルシエーンは痛いほどそれを知っているようだ。」

「?? 近年起きた戦争のほとんどがグラン帝国の侵略戦争だと考えれば、自分の領土と新しく書き換えてきた土地で、グラン帝国の所為で目茶苦茶にされた町だってたくさんあるだろう。そういうのって、侵略者側は知らないもんだと思っていたけれど、アルシエーンは違うのか。」

「主はおっしゃいました。故郷は心の中にあるものだ。美しき故郷を心に宿すものは、いつかその故郷にたどり着くだろう。神に祈りなさい。祈りこそが、平和への道しるべです」

?? ユーリスが淡々とした声で祈りの言葉を口にのせた。

「故郷は心の中にある……か」

?? ? 俺は馬を走らせながら空を見上げた。透き通るような空の青が、俺の目には痛かった。

神を恐れぬ男 2（後書き）

- - - * - - * * - - * - - -
10/9 改行などを更新しました。

神を恐れぬ男 3

ロンデスガルドの森へは比較的安全な道のりだった。ロンデスガルドの森へは、メイヒュー国の主要な街道として、一二を争うほど人気のある街道を通った。国境を越えて旅をする人は、ロンデスガルドの森の近くにある西側の出口を選ぶことが多い。比較的整備されているからだ。

俺たちは、ロンデスガルドの森の近くにある小さな村ヒュラーで、休息をすることにした。村では一軒しかないという宿屋の一階のレストランで、俺たちは軽い食事を取りながらロンデスガルドの森の噂話を宿の店員に尋ねる。

なんでも、グラン帝国の軍人が数名、森の奥へ赴くのを目撃者が多数いるらしい。

「他国の軍人が来るなんておかしくないか？」

「メイヒュー王国は事実上、グラン帝国の属国に成り下がったも同然だからな。ノーチェックで行ける場所も多いだろな」

俺の疑問に、ロリスがテーブルの上を人差し指で軽くはじいて答えた。ロリスが考え事をしながら答える時の癖だ。

「そういえば、森の奥の木がだいぶ切り倒されてるって話だねえ」

宿屋の女将さんが俺たちのコップにお茶を注ぎ足してくれた。

「ヒュラーの村を大きくするだのなんだの、お偉いさんたちが言っ

ていたけど、ここはこのままのんびりしたままがあたしは好きだ
どね……」

俺のいた世界でも、村を発展させるために開発をするか、このま
まのんびりした小さな村でやっていくかで、揉めているなんてこと
はテレビのニュースで報道されてた。どこの世界でも、人が住んで
いる以上、同じような問題が発生するものらしい。

ヒュラーの村は、「ロンデスガルドの森」という天然のダンジヨ
ンがあるから、冒険者の数はそれなりにやってくる。だけれど、観
光というわけではないので村には余りお金を落として行かない。

みやげを買わないもんな。冒険者は。厄介ごとは持ち込むけれど。

それに、冒険者全員がガラが良いわけではない。どっちかという
と無頼漢のほうが多いので、冒険者が宿に泊まるのを嫌がる一般村
民も多い。幸い、ヒュラーの村では冒険者である俺たちが宿を取
ることに對して反対する人はいなかった。駆け出しのペーペー冒険
者だから、見逃してもらっているところもあるかもしれない。

認めたくはないがアルシェーンは立ち振る舞いが優雅で楚々とし
ている。誰の目で見ても、俺でさえ上流の生まれだというのがわか
る。良家の出の娘と一緒にいる連中なら安全だろうと、村人たちが
思っているのは間違いないだろう。

「軍人さんたちが出入りしてくれているおかげで、治安はいいけれ
ど森へ入るときには十分気をつけるんだよ」

宿屋の女将さんの警告を頭の隅において、俺たちはロンデスガル
ドの森へと向かった。

ロンドスガルドの森は、有名なだけあって、広大な広さがある。一歩足を踏み入れると辺りは、木々が葉を広げ太陽を遮っていて昼間だというのにうす暗い。下草がうつそうと茂っていて、足をとられそう。時折、枯れ枝を踏みつけるため燥いた音が森に響く。聞こえてくるのは、鳥の声だろうか。下草に足をとられないように、注意しながら獣道ともいえる細いうねった道を奥へとたどっていた？

先頭を歩くのは、視力が良くて気配にも敏感なロリスだ。その隣を俺。アルシエーンが真ン中で、背後を攻撃された場合に備えてロリスが最後尾だ？

途中、何事もなく進み、例のぽっかりと地面に穴の開いているところまでたどり着いた。てっきりグラン帝国の軍人たちが見張りをしているかと思っただ、そんな奴らは一人も見かけない。

火山の火口付近とでも言えはいいのだろうか。何か大きな力でえぐれたかのように、地面に穴が開いている。しかも、底は昏くて見えない。

地面の遥か奥まで続いていそうで、不気味だ。

その穴の付近では見えない壁が立ちふさがっているようで、その見えない壁を手でたたくと澄んだいい音がした。

プラスチックでも、ガラスでもない。なんだろうこれは……。

ロリスがその透明な壁に手を触れると、その手の周囲が光り輝き、そこから放射状に光が文字と記号を描いて壁全体に広がった？

あいにくと、俺はこちらの言葉は少ししか読めない。ただ、見た感じなんかの数式のような。だが、こちらはあまり数学が学問としては未発達なはずなのに。

「……神聖魔法で作られた、侵入者を防ぐための結界のようです」

「解けそう？」

「簡単なものですから、すぐにでも……ただ、結界を壊すことによつてどんな影響があるかはわかりません」

結界、というからには何か悪いものを封じている可能性だってあるわけだ。帝国の軍人がいたのも、もしかしたら悪いものが外に吹き出していないか確認するためかもしれないのだし。

……いや、待てよ。最近この穴ができて、軍人の出入りが多くなつたのも同時期となると、この穴を作つて結界で封じたのも帝国軍人である可能性もあるな。

「凶悪なモンスターが出て来たら、たまらないしな。……それに、帝国軍人が貴人の誘拐にかかわっていると知つたら普通の冒険者は手を引くだろうな」

国同士の揉め事に、巻き込まれるのは嫌だ、と誰もが考えるだろう。場合によってはグラン帝国から犯罪者扱いされるかもしれないし。ロリスは言わなかったが、メイヒュー王国だって誘拐を容認しているかもしれない。表面上は、報奨金を出しているけれどね。

「この結界を解呪して、なんの影響もなかったとする。この穴にと

「うやって入るかも問題だな」

ロリスは結界越しに、地面に大きく口を開けている空洞をみつめた。ロープをたらして降りて行く、なんてそんな生半可なことでは攻略できそうにない。

「いつそ、飛行艇で突っ込むのが楽だけど……」

「飛行艇は国家レベルの持ち物だから、そうすぐには手に入らないわ」

ま、待ってくれ。そんな空飛ぶ乗り物俺はこの世界にきてから、一度も見たことないぞ。

「大国同士を結ぶ、高価な移動手段だからな。……でも、ほらひとり酔狂な奴がいるだろ」

ロリスの言葉で、俺以外の二人は納得したらしく「ああ、あの人居るか」とか頷いている。俺が誰だか領らなくて戸惑っていると、例によってアルシェーンが高飛車に知識を披露する。

「あんた、そんなことも知らないの？！ 空の旅人『シェリダン』といったら冒険者の間では超がつく名人よ。長い銀髪に、涼やかな顔立ち。とつてもかっこいいってうわさなんだから。世界で数少ない個人所有の飛行艇の持ち主で、世界中を旅しているのよ」

このミハー魔法使いめ！

アルシェーンは俺の素顔を見たことがない。俺の素顔を見たらこの態度、すこしは改めるのだろうか。しかし、国家レベルでしか持

てない代物を、なんで個人所有できているんだろうか。シェリダンは貴族か？

「なんでもシェリダンは消失技術の復元に優れているんだ。シェリダンの所有している飛行艇はかつて楽園があつたころ使われていたものらしいよ」

そんな代物があるなら、頼んで使わせてもらうか、旅人というぐらいなら一緒に洞窟を攻略してもいいわけだ。しかし、その前にやる必要がある。

ここが単なる天然のダンジョンなのか、グラン帝国の秘密施設なのか、ということだ。そのことをロリスに言ったら、「気にするな」と言われた。

「ここには、お宝が眠っているという情報があつたから掘り返しただけだ。グラン帝国の施設？ そんなもの無いね！ ……とでも言うておけばいい。確かに、グラン帝国がなんかたくらんでそうだが、他国の土地で怪しげなことを行つてるとは、さすがにグラン帝国も公にできないだろう。不問にされるさ」

「誘拐された被害者を救出してしまつたら？」

「報酬には、犯人逮捕については言及されていない。その場所にしたのでつれて来ました、とでも言つとけ」

恐ろしい、なんたる肚黒！！

「だが、グラン帝国に密かに追われたりしないか？」

「多かれ少なかれ、冒険者は狙われるものさ。俺たちがいままで発掘してきた遺跡だって、国家所有の者が多いんだぜ？ そっから出土した品物を売り払ってるし、モンスターだって帝国の実験の産物が逃げ出したものだっていわれてる」

「国家所有の遺跡を黙って発掘だなんて、犯罪じゃないのか？」

「この世界に存在する遺跡は全部、その土地を有する国の者だ。『楽園』という国があったおかげで、遺跡の数は星の数ほどだ。その全部を国がチェックできるわけではない。法律上は犯罪だが、どの国も容認している……というか、容認するしかない。そこまで管理できないからだ」

だから、冒険者なんて職業があるんだ。とロリスは言った。なんだか知りたくなかった世界の裏側を見てしまった気分だ。

こうなったら、このダンジョン攻略するしかないかも！

神を恐れぬ男 3 (後書き)

3 / 2 1 誤字など修正しました。

神を恐れぬ男 4

?? 問題は、その超有名な飛空艇乗りをどうやって仲間に入れるかだ。

?? 大体、いまどこにいるんだよその有名人は。

「有名人だからこそ、居場所がすぐにわかる。飛空艇が着陸できる街なんて限られているからな。街に入っていたらすぐにわかる」

?? 自信満々に答えるロリスは、もしかしたらこうなることを予想して、シェリダンの居場所さえ押さえているのかもしれない。

「シェリダンがいるのは、メイヒューだ。王都にいる」

?? やっぱり。しっかり聞き込みしてるんじゃないか。

「そこまで予想してるんだったら、前から教えてくれてもいいんじゃないの?」

?? アルシェーンがあきれて言うと、ロリスはにやりと笑ってしれつと答えた。

「何事も目で見ないと信じないタイプなんでな」

?? アルシェーンがほほを引きつらせている。アルシェーンの口から、何か出てくる前にロリスが間に入った。

「ここから、メイヒューまでは馬で一週間ほどの道のりでしょう。」

明日から向かいますか？」

「？　？　メイヒュー王国は砂漠に囲まれている。今から王都に向けて出発するとすると砂漠のど真ん中で一夜を過ごすことになるんだそうだ。」

「？　？　いくら、俺でもそれは、いやだ。」

「じゃ、そういうことで戻る……」

「？　？　俺はそのまま来た道を戻ろうと、振り返ったとき怪しげな気配を感じて周辺に視線を走らせた。わずかだけれど、獲物を狙う獣の潜めた息遣いを耳で感じ取った。」

「ロリス……」

「？　？　俺は、長剣の柄に右手を添えてロリスを横目で見た。ロリスも感づいたのか、姿勢を低くしていつでも短剣が出せる体制になっている。」

「今まで気がつかなかった」

「？　？　こういうのもなんだが、ロリスの相手の気配を感じ取る能力はかなりいいほうだと思う。新米冒険者がなに言ってるんだって思うかもしれないが、ロリスの気配を感じ取る能力が高いおかげで危険を回避しまくってるから、今まで生きてこれたんだ。」

「アルシエーン、下がれ。ユーリス、援護頼む」

「？　？　いよいよ近づいてきた気配に、俺は長剣を抜いて構えた。下

草のかさり、と踏みつけられる音がはつきりと聞こえてくる。がさり、とひときわ大きく草のなる音と同時に、影の形をした風が俺に襲い掛かってきた。剣を構えて影を受け止めて、その正体を目に映した。

?? 真っ黒な毛並みに敵意しか浮かべていない飢えた輝ける眸。なんでも噛み砕きそうな牙。俺が受け止めたのは、この牙だ。ひげが生えていることだけがこいつがねこ科の生き物だと知らせてくれる。俺の知識を総動員すれば、こいつはトラ。真っ黒な毛並みを持つトラだ。だけど、全長は俺よりでかい。

?? もう、絶対、こいつは、人を食うって思うね。

「こんな凶暴なのいるはずないんだけど」

?? ロリスが得意の短剣で、背後からトラを切りつけた。

「大体、トラは森の中に住めないだろっ」

「ルウ、よけなさい！」

?? 俺の突込みを、アルシェーンの言葉がかき消した。アルシェーンの大きな声のあとに、炎が燃え上がる音がすぐに聞こえた。

?? また、操れない魔法をつかったんだな。

?? 炎が帯状になって、俺のほうへと飛んできた。炎に罷れる寸前、トラの口から長剣をひっこぬいて、俺はしゃがんだ。うめき声とともに、肉のこげるいやな匂いが上からただよってくる。トラの顔面に炎があたったのだ。痛みへのたうつトラの背後に、短剣を

つきたててロリスはトラを絶命させた。

?? 苦悶の表情を浮かべて、地面に倒れ伏すトラを見下ろしながら、アルシエーンは高飛車に言い放った。

「ルウ、この皮、剥ぎなさいよ」

「はあ？」

「黒虎の皮は高級品よ。さ、剥ぎ取りなさい」

?? お前、本当に金持ちのお嬢さんか？ 金にやけにがめついんだけど……。

「自分で剥げよ」

?? 俺だって、動物の皮を剥ぐなんていうスプラッタなことはしたくない。

「私は帝国貴族の令嬢よ。皮剥ぎなんていう、卑しい仕事はできないわ」

?? 皮剥ぎが、卑しい仕事？

?? きよとんとしている俺に、ユーリスが遠慮がちに口を開いた。

「アルシエーンの出身国であるグラン帝国は身分階級ですべてがきまります。皮を剥ぐという職業は誰もやりたがらないため、最下層以下のモノがやることになっています」

?? いま、ユーリスの発音がおかしくなかったか？ 者……ではなくモノ、と言っていた。しかも、最下層以下ってどういうことだ。

「私の国には、人ではないモノがたくさんいるから、そのモノたちが皮剥ぎを行うのよ。この中で力があって、一番身分が低いのはルウでしょう。だから、やりなさいと命じたのよ」

?? ちょっと、なんかおかしくないか？

?? 俺がロリスに視線をむけると、彼はしゃがんだまま黒虎を検分している。

「これは、皮を剥いでも売れないからやめたほうがいい」

?? ロリスは触るのもいやだ、といわんばかりに黒虎の首についている金色の首輪をさした。金色のチェーンで作られていて、小さな四角い飾りがひとつだけついていた。

「ここについてるのは、グラン帝国の紋章だ。これって、魔法研究所のマークだね？」

?? 金色の飾りには、鷲をあしらったグラン帝国の紋章と、手と古代文字をあしらってあるマークが刻印されていた。

「魔法研究所から逃げ出した献体でしょうか？」

「さあな……研究所出身となると、買い手は無いからね……引き上げよう」

?? ロリスがさっさと元きた道を歩き始めたので、俺はあわてて

ついていった。聞きたいことが山ほどある。

「おい……さっきの」

「黒虎のこと？」

「違う……それも気になるけど、グラン帝国のことだよ。アルシェーンのあの反応は普通なのか？」

「?? 俺は声を落としてロリスに聞いた。俺のいた世界ではありえない言い方に、俺は戸惑っている。」

「帝国貴族だからな。普通だ」

「?? ロリスも声を潜めて答える。短い答えが、俺の心につきささる。」

「最下層以下のものって……」

「帝国貴族から言わせれば、人間以外のモノが存在するのだそうだ。妖精というらしい。その実態は、俺たちから見れば人間だ」

「?? 人間が、人として扱われてない？」

「どうしてそんな国があるんだ! ……俺のいた世界は……俺のいた国はそれは差別だと禁止されて……」

「グラン帝国では常識だ。人は生まれた身分で一生が決まる。覆すことはできない。アルシェーンはまだいいほうだ。妖精が見えないとは言わないから」

「他の国はなんで黙ってるんだよ。おかしいと思うだろ?!」

?? 国際社会では通じないとか何とか、よく新聞に出てるじゃないか。

「思ったとしても、何も言わない。グラン帝国は強い。それに……妖精たちもこれが当たり前だと思っている」

「……詳しいな」

「俺も何度も、帝国に行って居心地の悪い思いをしているからな」

「ロリスは帝国人じゃないから、身分は関係ないだろ?」

「あの国は、他の国の人は異端であり自分たちより身分が低く、野蛮だと思っている」

?? 俺は、後ろを歩くアルシエーンをちらりとみた。ユーリスと楽しそうに話をしている。

「アルシエーンはそうは見えないが」

?? 高飛車だが、俺はともかくとして、少なくとも彼女にとって外国人であるユーリスに対しては友情を育んでいるように見える。

「だから、彼女は異端なんだ」

?? そうだ、アルシエーンは故郷を追い出されたのだ。

「閉鎖的な国家であるグラン帝国で、彼女は帝国貴族になりきれなかった。身分制度は身に染まってしまったけれど、友情の育み方は染まらなかった。魔法も、炎しか操れない……帝国貴族である限り、魔法が不得意というのは、致命的だからね」

?? 『だから、彼女は異端なんだ』というロリスの言葉が脳裏に響く。いつも、高飛車で口を開けば憎たらしい言葉しか言わないアルシェーンだが、どこかで苦しんできたのかもしれない。

?? ……だからといって、さっきの身分制度うんぬん発言は許されない言い方だと思う。

その根性、叩きなおしてやろうか？

神を恐れぬ男 4（後書き）

改行などを更新しました。

神を恐れぬ男 5

メイヒュー王国の王都までは、何事も無くたどり着くことが出来た。すばらしい。途中一日ほどかけて横断したすな砂漠では、砂嵐に巻き込まれることも無く、得体の知れない化け物に食料にされることも無く来ることができた。王都は砂漠地帯のオアシスに築かれた、元は商人たちの休憩地だったところだ。それを、外敵から身を守るように周囲を高い塀で囲んだ。さすが王都というだけあって、王都へ行く者、王都から去るものたちが大陸公路を行きかっている。その中の一人が俺たちだ。どこまでも続く青い空と砂の地平線が見えるのが、ここが日本だといっていない。王都の入り口で割符のチエックをされる。旅人は身分を証明するために名前、出身地などを書かれた木製の札を故郷の役所で発行してもらう。戸籍を基に作るらしいのだが、俺はこの世界に戸籍は無い。そこで、ロリス一族の盗賊としての腕の登場となった。

俺がロリスの家にお世話になっていて、そろそろ旅に出ようとした頃。ロリスの両親がなにをどうやったのかは知らないが俺のちゃんとした戸籍の登録と割符を渡してくれた。どうやら、数年前まであった戦で焼け出されてしまったということにしてくれたみたいだ。そんなわけで、俺の割符にはロリスの故郷と同じジレスタ出身となっている。

ジレスタはファルティマ王国の南西部に位置し、グラン帝国とは海を挟んで対岸に位置している。数年前のグラン帝国の侵攻でだいぶ国土にダメージを受けたようで、戦で焼け出されるというのもあながち無かったことではないらしい。ファルティマ王国の紋章であるファルティマ草の花の模様が割符の一番上に刻印されている。その下には俺の名前、住所、家族構成などが書かれている。名前は

ルウ・イチノハス、住所はロリスの家の住所。家族構成は不明だ。怪しいことこの上ないが、ロリスはそれなりに名前のある一族らしく、俺はその付き添いとも思われているみたいだ。怪しまれたことは無い。

それとも、家族構成が不明だというのは日常茶飯事なのかもしれないけれど。

今回も何事もなく王都へと足を踏み入れた。俺は、メイヒューの都には始めてきた。茶色い土でできた家が立ち並び、大きな通りには市場がひしめき合う。色とりどりの絨毯や、布地が売られていて、地味な建物の色彩によく生える。メイヒューの王宮は、都の中心にあって美しい空色のタイルの装飾で覆われていた。

「シェリダンがよく行くという、酒場に行こうか」

シェリダンは飛空艇乗り場近くの酒場によくいるらしい。そこで、仕事を得たり、情報を買ったりしてるのだそうだ。有名な空賊という、背も高く、筋肉隆々の胸毛なんかちよつと濃くて見えすぎ、つていうのを俺は想像する。シミターなんか構えちゃったりして、ひげが濃かったり……。そんなことを考えながら、人の多いバザールを歩いていく。パンの焼ける甘い匂いや、肉の焼ける香ばしい匂いが俺の胃を刺激する。酒場で食事するのはわかっていたので、俺はいい匂いたちに別れを告げてさくさく歩いていくロリスの後をついていった。

「砂海亭」という酒場が飛空艇近くにある大きな店で、冒険者たちも利用するところのようだ。人気の店らしく、大きな店なのに席のほとんどが埋まっている。二階席があるようで、ロリスはそこへ歩いていった。途中で、店員にシェリダンは来てるか？ とロリス

が聞いたところ、どうやら食事をしに來たらしく店員が二階席の隅に座って食事をしている人物をさした。

そいつは、どうみても空賊にはみえない、貴族のような洒落た服装と身のこなしの人物だった。ロリスは無遠慮に近づいていって、シェリダンに話しかける。

「俺は、ロリス。空賊シェリダンに相談がある」

「あの有名な盗賊団の末っ子が何のようだ」

食事をする手を止めて、俺たちを見つけた彼は、とても端整な顔立ちをしている。アルシェーンなんか、かつこいいと思わずつぶやいたほどだ。月の光のような流れる銀髪は、肩の辺りまで伸びていてさらさらのストレートヘア。彫りの深い顔立ちに、空の色の眸が思慮深く輝いている。話し方も、振る舞いも上品で、服の趣味も悪くない。軽装だけれど、仕立ては俺たちが着ている服より断然上等のものだ。言われなければ、こいつが冒険者……空賊には見えない。若き独身貴族といっても、充分通じる。

「とある依頼を受けた。それを実行するにはあんたの飛空艇の腕が必要なんだ」

「私を雇うほど金が有ると思えないな」

俺たちをぐるっと目だけで見渡してシェリダンは言った。

「依頼の報酬の五分の二をシェリダンに渡すというのではどうだ？」

「依頼の内容を先に言え」

ロリスが掻い抓んで、誘拐事件の話をした。変な実験動物が出てきたことは、巧みに伏せられていて、森の奥のダンジョンへの入り口に飛空艇が必要であることを説明した。

「ふん……あの国王に借りを作れるのか……いいだろう」

喜ぶ俺たちに、シェリダンが条件を突きつける。

「ただし、君たちの力量が知りたい。簡単な仕事を依頼するのでそれがクリアしたら協力しよう」

無条件についてわけにはいかないだろうね。俺たち、初心者冒険者だし。

「俺の友人からの依頼なのだが、貴重な生き物の卵がある部族にさらわれてしまつてね。その卵を取り返してほしいんだ」

「貴重な生き物つて……？」

「砂漠魚」

ロリスたちが、それは大変だ、とかなんとか言っている。そんなに絶滅しそうなのか？ ユネスコに登録できるほど？

「ある部族つて？」

「バージ族」

トカゲ野郎かつ、とロリスが呟く。この世界には、人間と共存して

いる二足歩行した生物がたくさんいて、バージ族もそのひとつだ。俺からすれば、ヤモリとかイモリとかが服をきて二足歩行して人語を話しているように見える。

バージ族は原始的な生き方をずっと守り続けているようで、いまだに狩猟民族なのだそうだ。砂漠の岩山で生活をしていて、砂漠に住む生き物たちを食料としている。彼らと、メイヒュー王国では契約が結ばれていて、貴重な砂漠魚だけは狩猟の対象にしないと決まったらしいのだがあんまり守られていないのだそうだ。それだけ砂漠での生活が厳しいのだろうが、卵までとられてしまったのであれば、砂漠魚が絶滅しかねないということで見えぬふりで見逃してきた研究者たちが取り締まることにした、ということのようだ。

「バージ族は好戦的で、人間を見下しているから注意するように。卵は無傷で持って帰ってこいよ。全部で三つだ」

たとえ危険だとしても引き受けるしかないのだ。

俺たちが考えた作戦は、バージ族の住処を探して忍び込み、卵だけをいただいて帰るという至極平和的なものだ。気がつかねければ、気がついたら、どうなることか……。バージ族は好戦的で、人間を捉えて食うらしい。

うーん。広場でキャンプファイヤーをやりながら棒にくくりつけられた人間の周囲をバージ族が踊っている姿が浮かぶんだけど。

バージ族の住処は砂漠。しかも定住じゃないからどこに住んでいるのか判らない。とはいえ、結構大きな集落らしいので、情報を集めれば現在の位置ぐらいは特定できそうだ。

そんなわけで、バージ族の情報収集のためにバザールへ来ているのだが、オレンジを露天販売している爺さんに俺は捕まった。ものすごい話好きの爺さんで、俺がまとめてオレンジを買ったらぺらぺらと機嫌よく話しかけてきた。なんだか元は冒険者で、世界を又に駆け回った超有名冒険者だったらしい。

……この干からびた、コンブみたいな爺さんが？　ありえねえ。

だけど、俺はここの世界の知識が足りないのでも知りえることは知っておきたい。話している内容が全部ホラじゃないことを俺は祈った。

「お前さん、バージ族には会ったか？」

タイムリーだっじいさん！

「会ってないな。じいさんは、バージ族と戦ったのか？」

「当たり前じゃ。昔は、今ほどバージ族は温和しくなくてのう。人間の集落を襲っては、女子供をつかまえて、食料にしまったんじやよ。たびたび、わしらも仲間を集めて狩りに行ったもんじや」

「そんなに狩りにいったんなら、バージ族の弱点とかわかったのか？」

「それはのう……」

じいさんは、ヤギのひげのように長く伸びたひげに手をやりしばらく中を見ていたが、いきなりやり、と笑って突然話題を変えた。

「お前さん、歌は好きかの？」

「こんなときになに言ってるんだよ」

「歌はいいもんじゃ……どんなにつらくても、自分が楽しければ自ずと道も開かれるってもんじゃ」

盛大に爺さんが笑ったところで、話は終わったようだ。爺さんは俺に頑張れよと言って、次に来たお客にオレンジを売り始めた。

俺は、宿へ続く道に三步ほど歩みを進めてから振り返って、オレンジ売りの爺さんを見た。小さな木製の椅子に何気なく座っているけれど、その座り方は危険なことがあってもすぐに構えられるように浅く座っている。超有名冒険者じゃなかったとしても、本当に若い頃はそここの冒険者だったのかもしれない。

宿へ帰り着いて、部屋でみんなにオレンジを配りながらオレンジ屋の爺さんの話をした。

「そのおもしろ爺さんの名前は？」

ロリスが渡されたオレンジを服のすそで磨きながらたずねてきた。

「慥か……ラティール……かな」

ロリスから、ブホッという無様なむせる音が聞こえた。オレンジを一口食べたらしく苦しそうに咳をしている。それをユーリスが近寄ってゆつくりとロリスの背をさすった。

「どうかしたのか……？」

俺がきよとん、としているとアルシェーンが俺の前に立ちはだかり、お得意の指差しポーズで俺を右手人差し指で指差す。左手は腰だ。

「あんた、本当に非常識ね！ ラティーカといったら、あの竜殺しラティーカよ？ 世界を救ったのよ？！ 冒険者なら誰でも知ってるはずよ！ 生ける伝説よ！ 生ける神よ！！ この、歩く非常識！！」

アルシェーンはキンキン声で一気に俺にまくし立てた。あまりの勢いに、俺はぽかーんと口をあけてアルシェーンの言葉を聞いているしかなかった。

「大体なんであんた、そんな人物と話できてるのよ。私だってバザールのオレンジ屋には行つたけれど、普通のじいさんだったわよ！…… ははーん…… あんた、からかわれたのよ」

いや……俺、別に英雄ラティーカには憧れてないから、からかわれたところで怒りもわかないんだけど。

「そうよ、からかわれたんじゃないかなかったら、この大天才にして絶世の美少女である私を放ってこんなへらつとした男に、話しかけたりしないわ」

アルシェーンは一人納得して、高笑いをした。ラティーカのことはどうでもいいけど、『へらつとした男』っていうのは、ちよつとむつとしたな。

「でも、素敵じゃないですか。お爺さんは、バージ族のことを教えてくださつたんでしょう。本当なら、どなたでもいいじゃありません

んか」

確かに、あの無駄に長い話の中でバージ族のことはちよくちよく話しにあがったし、弱点こそ教えてくれなかったが生活習慣とか、好む場所なんか教えてくれた。ユーリスはにつこり笑って、話の筋がおかしなところへ行こうとしているのを修正した。復活したロリスが、話をまとめる。

「今のバージ族の住処は砂漠の南西部だ。明日はそちらへ行くってことでいいな」

俺たちは頷いた。

日程も決まったし、飯も食ったとなればあとは、風呂に入って寝るだけである。アルシエーンはユーリスを誘って風呂に行くようだった。砂漠の真ん中の町で風呂に入れるというのは、とても魅力的らしくアルシエーンとユーリスは浮かれていた。はしゃぎがちに、部屋を出て行った後でベッドにごろんと横になったロリスがぼつりと呟いた。

「俺たちしか知らないことだけど……」

ロリスのいう俺たち、というのはロリスみたいな宝物を遺跡からとることを専門にしている盗賊団のことだ。

「竜殺しラティカは、名をあげる前はオレンジ屋だったらしい。現役を引退してからは、オレンジ屋を再開したって話だ」

風呂の支度をしていた俺は、思わず手を止めて振り返った。ロリスはひよいと起き上がって、言葉を続けた。

「ルウが会ったのは、本人かもしれないな」

たまには、いい事いうじゃん、と言おうとした俺の台詞をさえぎってロリスはまだ言葉を続ける。

「どこで店を開いたのか判ってないから、世界中でラティーカを名乗るオレンジ屋がいるんだけどな」

こいつ、一言多いじゃないか。

バージ族の聖地は砂漠のと真ん中にあり、苛酷な環境化にある。俺たちは十分に装備を整えて向かったはずなのだがはやくもつらくなつて来た。行けども行けども砂だらけというのは心理的な圧迫感がある。三百六十度、上下に分けるのは空と砂だけ。最初こそまぶしい朝日と、鮮やかな夕日に感動したけれどそれが三日も続けば飽きてきた。昼間の熱い時間に軽く昼寝をし、朝早くと暗く涼しくなつてから行軍するようにした。それでもかなり体力は奪われていく。テレビで頭から布をすっぽりかぶっている人たちを見て、暑くないのかなと思ひもしたが、逆にかぶらないと太陽の熱で焼け死にそうだった。布をかぶっただけでこんなに涼しく感じるとは思わなかった。メイヒューから、五日ぐらい砂漠を歩いたところに聖地はあるという。砂漠にどんと大きい石がたくさん並べられているのだそう。メイヒューにある砂漠は完全な、すな砂漠ではなく荒涼とした大地と、すな砂漠が混じっている。聖地はおそらく荒涼とした大地にあるのだらうと、俺たちは予想をしていた。四日目のはじめに、すな砂漠を抜けて大きな岩山が連なる乾いた大地へと抜けた。大地にはひびが入り、背の低い草がまばらに生えている。これが風化したらすな砂漠へと変貌するのだらう。

「バージ族は何をあがめているんだ？」

「サラマンダーだ」

俺の問いかけに、苦もなくロリスが答えた。

サラマンダーって、火トカゲか？！

口から、火を吹いたりするの catt?!

「口から火を吹くのはドラゴンだろ。サラマンダーは、そいつ自体が炎で包まれてるトカゲだ」

「それは……つまり」

俺とロリスは何気なく、後ろを歩くアルシェーンへ視線を向けた。

「そういうこと」

俺の言いたいことがロリスに伝わったのか、何も言わずにロリスは頷いた。

火の魔法しか使えないアルシェーンの魔法はまったく効き目がないってことだ。

「今回倒すのは、サラマンダーではないし……ただ、サラマンダーの加護とかなんとかで、バージ族は炎には強い」

それは、アルシェーンの魔法が通じないってことか……。

バージ族と戦うなんてことがないようにしたいものだ。

夜も更けて、交代で火の番をして睡眠をとっていると、まだ、見張り交代ではないのにユーリスが起きだしてきた。

「まだ交代じゃないよ」

俺は、薪をくべながら起き上がったユーリスに答えた。

「寝れないんです」

仕方がないな、と俺はため息をついた。ごつごつしている岩肌の上に寝ているので、いくらなんでも寝心地は悪い。ユーリスは教会にいたそうだから、こういうところで寝るのはあまりないのだろう。俺だってないけれど、生来のがさつさがこんな時に役にたった。どんなところでも寝れる。

「ルウ、話し相手になってもらえませんか？」

いつもより、声のトーンを落としてユーリスが言った。俺は構わないと頷いてユーリスの言葉を待った。

「ルウはなぜ、冒険者になろうと決めたのですか？」

「知りたいことがあったからな」

「それが、この間のクエストにかかわる事ですか？」

俺は一度、目の前で『世界を渡る方法』について書かれた羊皮紙を手におきながら、読む前に勝手に燃え上がり灰になったことがある。ロリスは他人に読まれないような魔法がかけられていたのだろうと言っていたが、俺はその情報がのどから手が出るほどほしかった。俺の世界に戻るには、それぐらいしか思いつかないからだ。

「ルウは、普段あまり執着しないのに、そのことにはだいぶ拘っていましたから……ルウはこの世界が嫌なのですか？」

「嫌なわけじゃない」

そう、これは本当。

最初は、嫌で嫌で、あまりにも違う生活に帰りたくて仕方がなかったのだが、今では嫌だと思わない自分がいる。帰りたいのは、相変わらず変わらないのだけれど。この生活に慣れてきたからだろうか。

「なら、どうして……『世界を渡る』ことは大変危険を伴うと……言われています」

「危ないと、なぜユーリスは知っている？」

「私たち神官は……いえ……私の信ずる神であるプティマ神は、人と人をつなぐ架け橋となる……交渉を司る神といわれています。それは、プティマ神が『世界を渡る』ことができたことからきています」

なにっ！？　じゃあ、優秀な神官であるユーリスに聞けば、『世界を渡る』方法がわかるのか？

「経典には、世界を渡るのにたくさんの犠牲が必要だったと書かれています。そのぐらい危ないといえます。だから、そんな無茶なことをしないでほしいのです」

「どうやって、世界を渡ったのか知らないか？」

「大地から空へ向かって、大きな光の柱が現れそこを、神が通り抜けたと経典には書かれています。ですけど、ルウ、その経典には続きがあります」

ユーリスは表情を引き締めていった。

「人と人をつなげるのは、世界と世界をつなげることより難しい。誰もがみな、光の柱となり人と人の境をなくし、心と心をつなげるのは容易いことではない。この世界と見知らぬ世界をつなげる事と同じように、人と人のつながりを大事にせよ……隣人を愛すべし」

経典を暗記しているのだろう、すらすらと言葉を述べるユーリスは神々しかった。

「ルウは、時折どこか遠くを見えています。ここではないどこかを。それが、私には気がかりなんです」

隠していたつもりだったのに、気がつかれているものだな。

「俺には故郷がない。無い故郷を思うから、遠くを見てしまうのだろっ」

「戦争でなくなってしまったのでしたね」

俺は黙って頷いた。

本当は、そうではない。

ここには無い俺の故郷を思っているときだから、遠くを見てしまうんだ。この世界の向こうにあるかもしれない、俺が生まれた世界を。これが、夢だったらいいと何度思ったことが。朝、起きればいつものじぶんのベッドの上に寝ていて、フローリングの上には脱いだセーターが転がっている……そんな朝を迎えられると寝る前に何度

思ったか。

「ルウ……いつか、故郷の話をしてくださいますか？」

「そうだな」

それは、きっと俺が元の世界へ帰るときだろう。

「でも突然なんで……」

俺が、ユーリスが唐突にそんな話をしてきたのか不思議に思っ
て尋ねようとしたら、ユーリスは膝を抱えたまま寝入っていた。
やれやれ、と俺はため息をついてユーリスの肩から落ちかけていた毛布を
をかけなおした。

翌日、ロリスにぎつと夜中にユーリスと話したことを伝えると、ロ
リスは困ったように眉を寄せて、ためらいがちに言った。

「バージ族の聖地は、大昔、プティマ神が光の柱を上げて、世界を
渡った場所だと言われているんだ」

え……？ 俺、もしかしたら帰れちゃうの？

神を恐れぬ男 7

神様が世界を渡った場所だといわれている、バージ族の聖地。もしかして、バージ族は神様が世界をわたったのを見て、ここが聖地だと定めたのかな。

世界を渡った場所だったとしても、俺はその世界を渡る方法とやらを知らないわけで、今の時点では俺は帰ることができない。

何が必要だって言うんだろう。強力なアイテムか？ それとも、神様を信じる心か？ それとも、……神の力か？

俺は岩陰から、バージ族の動向を探りながらそんなことを考えた。

バージ族は、昼行性の性質を持っていて昼間は女が、武器を手に狩りに出かけている。住まいは聖地ではないようだが、祭りが近いらしくバージ族のほとんどが聖地に入りをしていた。聖地は広場のように広く平らに整地されたところに、焚き火を炊くためか、木でやぐらが組まれている。周囲は岩山で囲まれているので、そのうちのひとつに俺たちは身を潜めて、伺っていた。

聖地は仮の住まいでもあるらしく、岩山に住まいを作っているところもある。住居か、そうでないかの違いは岩山の岩肌にくくりぬいた穴がいくつも並んでいたら、そこは住居だ。どうやらくり抜かれた穴は、窓らしい。狩猟民族にしてはかなり文化的な生活を送っているんだろう。侮れないに違いない。やはり、出入りが多いので夜になってからこっそり忍び込んで砂漠魚の卵を助ける、といった作戦が一番安全なように思えた。

俺たちは、日が暮れるまでバージ族の聖地を離れ近くの岩陰で暑い昼間を過ごした。

「ここって、聖地なんですよ？」

岩肌が冷たくて気持ち良いのか、アルシェーンはぴったり岩にくっついて言った。

「そう言われています。主が最後に訪れた場所ですから」

この大陸で一般的に信じられているプティマ神への信仰は、『経典』という形で広まっているらしい。プティマ神がこの世界で何を行ったのか、またそれにはどんな意味があつたのかなどが凡人にもわかり易く書いてあるのだそうだ。

俺の住んでいた世界と同じで、神様自身は文章を残さないで、その弟子たちが書いたものを編纂したものが一般的に普及している。

プティマ神は、最後にここにきて光の柱を上げて異世界に渡っていったのだという。それを、神の国に帰ったとも、この世界に遣り残したことが無いので別の世界へと渡ったとも言われている。

「その割には魔力が希薄ね。ここでは魔法を使えないことも多いんじゃないかしら？」

アルシェーンが言うには、魔法を使うには自分自身の魔法の素質も大事だが、地表に流れている目に見えない力を駆使して具現化するのが魔法なのだという。つまり、アルシェーンはその魔力の具現化を炎にしかできないのだ。

偉大な魔術師というのは、ほんの少量の魔力で最大限の力を持った具現化を行うのだという。アルシエーンはその卵……というか素質があるのだけれどできない、というタイプなのだという。いずれも本人から聞いた話だから、本当のところはわからない。

「プティマ神は魔法を使いません。使っているのは神の奇跡ですから」

「魔法と神聖魔法は力の出所が違うのか……」

「はい。魔法は大地の力を借りて、神聖魔法は人の内なる力を使います」

ロリスにユーリスが丁寧に答えた。

プティマ神が魔法を使えないで、神聖魔法……神の奇跡で光の柱を上げて世界を渡ったのならば、人の内なる力とやらを使えば、世界を渡れるのかもしれないのか。そうになると、神聖魔法が使えるユーリスがもしかしたら、光の柱をあげれるかもしれない。

「神聖魔法は誰でも使えるわけではないのдар？」

「そうですね……何十年も祈りをささげ修行をしても、神聖魔法は使えるようにはなりません。魔法のように『魔法の素質』というものがかわるかどうかも不明ですし……なぜ使えるものが少ないのかまだ、解明されていません」

「ユーリスはどうだったんだ？」

「気がついたら使えていました。力を使って人の傷を治すことはみんな当たり前に行えることだと思っていましたから」

実は、神聖魔法が使えるのはごく稀であること、しかも……当時は何の信仰も持っていなかったユーリスが使えてしまっていたので、プティマ神教会はあわてて彼女に信仰を与えた。

「教会に入ったことに後悔はしていません。あのままだったら、力の加減ができなくなっていたでしょうから」

ユーリスはアルシエーンをみてにつこり笑った。アルシエーンはその笑顔をみて、驚いた表情になりはにかんで笑った。

なんで微笑みあっているのか俺にはわからない。俺の知らないことを彼女達は共有しているのだろうか。

夜になるのをまって、俺達は聖地へ侵入した。砂漠魚の卵は奥まったところにしまわれていたが、なぜか今日は祭りらしく、中央の広場で炎が焚かれその周辺に卵が並べられている。大きさとして成人男性が一抱えするぐらい。

それって、俺とロリスがひとつづつ持つて、あとひとつはユーリスとアルシエーンに持たせるって事？ 危険度が増すな。しかも祭りのメインディッシュかなんなのか、みんなの視線が集中しているしなにか良い案を考えないと……。こういう場合、映画みたいに眠くなる煙みたいなのを撒き散らして、みんなが眠った隙に卵を奪って逃げるってというのが定番だけど、そんなものはあつたっけ……？

「そういうことは、魔法でできる筈なんだけど……」

そういつて、ちらつとロリスはアルシェーンをみた。

ああ、アルシェーンは炎が得意だったけ。

そうすると、陽動作戦……誰かが罠になつて騒ぎを起こしている間に卵を抱えて逃げるってことになるけれど、卵は三つ。俺とロリスは卵を運ばないといけないし、そうなる……。

やっぱり俺もアルシェーンをみた。どうみたって、細腕のアルシェーンよりユーリスのほうが力がある。

「私が罠になりましょう」

自信たっぷりに言ったのは、ユーリスだ。

「アルシェーンには私が神聖魔法をかけて、一時的に筋力を増大させます。私でしたら、幻覚の魔法が使えますから、ちよつとの間バ―ジ族の方々に驚いていただいている間になんとかしましょう」

アルシェーンの魔法の腕より、ユーリスの神の奇跡のほうが信じられる。他に良い案が浮かばないし、これでやるしかないだろう。

「ユーリス、危なくなったら足が速くなる神聖魔法を使って、みんなで逃げるんだ。自分ひとりが犠牲になろうなんて考えるなよ」

どこか自分を犠牲にしていまいがちなユーリスに俺は言った。俺としては何気ない一言だったのだけれど、ユーリスは嬉しそうに笑った。

さっそくユーリスが神聖魔法を使い始める。淡い光に包まれて、ユーリスが祈りの言葉をつむぎ始めると、広場のほうでは急に騒がしくなっていた。魔法の効果が現れてきたみたいで、バージ族達が周囲をせわしなく見回しながら、あわてて広場から駆け出していた。

何が見えているのか、ちょっと気になるな。

俺達は、その好きに岩影から駆け下り、広場の中心に置かれていた卵まで一目散にかけていった。よっぽど怖いものが見えているのか俺達には全然気がついていない。

俺が広場に駆けつけたとき、並べられている卵のひとつにひびが入っていることに気がついた。もしかして、割れちゃったのか、と思っていたらその卵はことごと動き出した。

これって、生まれようとしてる……？

燃え盛る炎の近くに置かれていたので、温まって出てこようとしているのかもしれない。もしそうなら、卵を抱えられないしどうしよう。俺が躊躇していると、すでに卵を抱えたアルシェーンとリスが俺を注目している。

「これ、生まれそうなんだけど」

「それでも、持っていくしかない」

さすがに、卵の近くですったもんだしていたから、バージ族の一人が気がついた。俺に向かって何かいっているが、あいにくと俺はバージ族の言葉はさっぱり理解できない。それでも、怒ってるのだ

ろうなつていうのはわかる。 数人のバージ族が俺達を取り囲もうとしている。

「二人は先に行け！」

卵を抱えている二人は不利だ。俺がひきつけている間に、逃げてもらったほうが良い。ロリスは一瞬だけ迷いを見せたがアルシェーンが走り出したのを見て、つられて走り出した。俺のすぐ後ろでは、さつきより激しく卵が動いている。

まさに、卵からなんか出てきそうだ。

バージ族たちはさらに包囲網を少し縮めて、俺のほうへ槍を突き出す。 どうやって逃げようか、と考えていたら俺の足元できゅい、という泣き声がした。それが合図になったのか、いつせいにバージ族が俺に襲い掛かってくる。いくら数人とはいえ、大立ち回りをするほどの剣の腕ではないので、あぶなっかしい足取りですばやい突攻撃をよける。中には、俺に掴みかかろうとするバージ族もいる。掴みかかると言うか、体術なのかな？ 再び、きゅいっという泣き声が今度は耳元でした。声のほうへ視線を向けると体長三十センチぐらいの魚が、宙に浮かんで……背ひれや尾ひれを動かして空を泳いでいた。

孵化しちゃった……。

そんな悠長なことが頭によぎっていたのがいけないのか、掴みかかろうとしてきたバージ族に頭をむんずと手で捕まえられた。ものすごい握力でなにかしようとしているのを、俺がもがき振りほどく瞬間に、かけていたサングラスが音を立てて地面に落下した。俺が顔を上げると、バージ族達はそのままの姿勢で時間が止まった

かのように動かない。

ざわつきが急に静かになったのを不審に思ったのか、アルシェーンが俺に振り返り、目を見開いて頬に赤みが差したかと思うと、うつとりするような視線で俺をみつめて立ち止まった。

人間ならまだわかるけど、バージ族にも俺の顔って有効なのかよ！

俺が一步足を踏み出すと、バージ族達は手にしていた武器を放り出し俺から十分な距離をとると一斉に地面にひれ伏した。　なんだかよくわからないけれど、これは好機だ！

「ユーリス！　俺のほうを見ないでアルシェーンをつれて走れっ。いくぞ、ロリス」

ロリスは俺の顔に免疫ができていたので、まったく動じていない。卵を抱えなおしてロリスは走り出した。俺も続けて走り出すと、きゅいきゅいいいながら、砂漠魚の子供が空を泳ぎながらついてきた。

これって……俺が親だと思ってるのかな？

孵化するときに一番近くにいた俺を親だと刷り込まれてしまったのは事故だ。どうも、保護生物らしいので、今後どうするかはシエリダンに相談したほうがいいかもしれない。俺達は、地面にひれ伏すバージ族たちの合間を縫って、見事聖地より帰還した。

本当に、俺ってなんなんだろう……。

神を恐れぬ男 8

相変わらずアルシエーンは、呆けた顔で俺を見ている。聖地から抜け出して、王都への帰り道だ。サン格拉斯のスペアなんてもつてないから、こうして素顔を晒しているわけだが、アルシエーンだけが俺の顔をみると頬を赤く染めて呆ける。

ロリスは免疫があるし、ユーリスは、神聖魔法を使ったとかで、俺の顔を見ても平気なようだ。アルシエーンにも同じ魔法をかけてくれれば言いのだが、呆ける前に魔法をかけないといけならしい。どうにかして正気に返ったときに神聖魔法をかけてもらおうとするのだが、そのチャンスはなかなかやってこなかった。

その上、「いま、正気に返ったらルウに魅了されていたという事実で、アルシエーンが烈火のごとく怒りそうだよ」というロリスの一言で、魔法をかけてもらうのを俺は躊躇した。アルシエーンが烈火のごとく怒って、その当たり先は俺に決まってる。しかも周囲は砂漠。炎の魔法使いたいほうだいいじゃないか。

街中なら魔法を盛大に打ち出すということもしないだろうから、王都に戻ってシェリダンと会っているときにこっそり神聖魔法をかけてもらうことにする。

それと、もうひとつ問題を抱えている。砂漠魚の子供……俺にすっかりなついてしまったようで、ふわふわ空を泳いでいたかと思うと、俺の頭の上ののっかりくつろいだり、肩の上に乗ったりとスキンシップをしてくる。何を食べるのかよくわからなかったので、バックにつめておいた乾いた木の実や乾燥した肉などを砂漠魚の前に並べたら旨そうに、乾燥した肉を食っていた。

こいつ、肉食なのか……。

頭をそつとなでてやると、気持ちよさそうに目をつぶる。砂漠魚の体の表面は岩みたいに硬い。下手な刃物は通さないほど硬い皮で覆われている。触るとすこしだけ、ざらざら。目の粗いやすみみだ。俺がアルシェーンに呆けたように見つめられる以外は何事もなく王都に帰ることができた。

砂の海亭では、シェリダンがいつものように一人で杯を傾けている。俺たちがシェリダンに近づいていくと、向こうも俺たちに気がついたみたいで、行くとときより一人……いや、一匹かな増えているのを確認すると、遠目でも驚いたように目を大きくしたのが頷った。

保護生物を孵化してきたら、驚くか……。

俺は、俺の頭の上で得意げにきゅいつと鳴いた砂漠魚の重みを感じながら悠長にもそんなことを思っていた。とはいえ、俺たちはシェリダンの席のテーブルの上に無事に保護して持って帰って来た砂漠魚の卵を二つ置いた。

シェリダンが俺の頭の上の生物を見て渋い顔をしている。こういう交渉ごとはすべて、ロリスに任せることにしている。奴は、口から先に生まれてきたようなものだからな。

「持ち帰ってきたよ」

シェリダンは、ロリスのいけしゃあしゃあとした態度に、苦笑しながら俺たちに席を勧める。

「頭の上に乗っているアレはなんだ」

シェリダンの視線が俺の頭上に突き刺さる。俺の頭の上では、気持ちよさそうに砂漠魚がのんきに寝ている。

俺は、その視線が痛くてつい、にへらと笑った。

「依頼された三個の卵のうち一個は、孵化寸前だった。保護されている卵なら、すべての記録がされているはずだから、いつ孵化するかもわかったはずだろ？」

ロリスが俺のしまりのない口を、ひと睨みで閉めさせるとシェリダンに向かっていった。

「孵化寸前の対応を教えておいてくれても良かったんじゃないか？」

「それをいうなら、砂漠魚の保護記録は資料として誰でも閲覧可能だ。事前に調べて行くべきだろう」

「その資料はどこだ？」

「王立図書館だな」

「王立図書館に入る資格は、メイヒュー国民であるか、メイヒュー王国と友好関係にある国の出身か、盗賊でないこと」

「どれも満たしていないなんて、いうんじゃないだろうな」

「いわずもがな、俺は盗賊だ。図書館には入れない。アルシェーンは国を追われている。ユーリスはメイヒュー王国と国交のないジリ

ン王国出身だ。そして、ルウは俺の一族だ……さて、誰が王立図書館に入館できる？」

シェリダンとロリスが火花を散らしている中、俺は呆けているアルシェーンを介抱しているユーリスに耳打ちした。

「アルシェーンって、国を追われるほどの犯罪者なのかよ？」

「どうも、帝国では自由に外国へ行くことが禁止されているようなんです」

「海外旅行をするだけで重罪か？」

「皇帝の許可がなければ、死罪のようですよ」

そんな俺の常識からは考えられないな。さしあたり、江戸時代の脱藩と同じようなものなのだろうか。海外旅行なんて元いた世界ではしたことないが、俺だったらそんな窮屈な生活は耐えられないかもしれない。

旅行ぐらいで、重罪だなんて俺は、ごめんだ。

「ルウは、ロリスの一族なんですね」

ユーリスがアルシェーンの視界を両手でさえぎって、正気に戻そうとしている。ちなみに俺は、街に入るなりすぐにサングラスをかけている。俺が、ユーリスの問いに黙ってうなずくと、そうはみえませんが、とユーリスが微笑んだ。まあ、確かにどうみたって、俺の雰囲気じゃ盗賊にはみえないだろう。

「故郷が無くなってから、あいつの家族に拾われたからな」

「そうでしたか、ご苦労されていたっしやるんですね」

ユーリスは、ブツブツと呪文を唱えると両手から淡い光が漏れ出る。すぐにその光は収まって、アルシェーンの両目から手を離れた。

「もう大丈夫ですよ」

ユーリスがいうやいなや、アルシェーンははつとした表情で俺を見て、穴が開きそうなほど俺を睨み付けた後、つんと顔ごとそっぽむいた。俺が何かアルシェーンに言い返してやろうと思っていたら、シェリダンがため息をついて立ち上がった。

「……ついて来い、その件の本当の雇い主に会わせてやる」

連れて行かれたのは、メイヒュー城だった。こういうときには、門番とかが出入りのチェックをするものだと思うけれど、ノーチェックだ。シェリダンが軽く挨拶しただけで、門番達は気軽に通してくれる。

すれ違う場内で働く人々もシェリダンに挨拶したり、挨拶し返したりと仲がよさそうだ。ここまでノーチェックとなると、メイヒュー城にいる偉い誰かからの信頼が厚いとは思えない。彼の仕事は空賊。だけれど、為政者側に気に入られる仕事……保護動物の保護の手伝いをしているからこそ、悠々と飛空艇なんてものを個人所有にしていられるのだろう。

シェリダンときたら、なんのお構いもなしにどんどん城の中を歩いていく。やがて、王族とかかわりのありそうな、豪華な扉がたく

さん並んでいるエリアまでやってきた。

あ……ちょっと嫌な予感がよぎった。これは、お偉いさんにどーんと紹介されてしまうパターンだ。

その豪華な扉のうち、一番豪華な扉の前にシェリダンは立ち止まった。扉の前にいる衛兵に自分が来たことを伝えと、衛兵が扉の中に向かって大きな声で言った。

「シェリダン・グリフィン候、ご入来」

候?!

ってことは、貴族かよつ。しかも、侯爵か……。

そこは謁見の間のように、上座に玉座があり若い男が座っていてそこに向けて赤いじゅうたんが敷かれている。周囲は黄金で彩られた数々の調度品や美術品が並んでいて、豪華なつくりになっていた。天井を見上げて、きらきら星のように光るシャンデリアに、あれが落ちてきたら痛いだろうなと、どうしようもないことを考えた。

「よくきたな、シェリダン」

親しそくに玉座に座る男が言った。ロリスや俺たちが膝を付いて頭を下げているのにもかかわらず、シェリダンは直立不動のままだ。

「仕事が終わったんで報告に来たんだ、陛下」

シェリダンは、物怖じせずに答える。

玉座に座る男は、メイヒュー国の王様らしい。若すぎ……！俺より年上だけど。

王様っていったら、白いひげが生えてて、どっしりとした威圧感に「うむ」とか偉そうな態度とかしちゃうのを想像してたんだ！ロードオブザリングとか、ロードス島戦記とかそうだろう？！カッケーっと思うような渋い爺さんが、威厳たつぷりに「勇者よ、世界を救え」とか言ったら、俺だったら引き受けちゃうね！

まあ、確かに威厳たつぷりの渋い爺さん国王にだって、若い頃はあったわけで。歳を取ってからもかっこいいってことは、若い頃は相当かっこいいわけだ。メイヒュー国の王様は、渋い爺さん国王になる資格十分みたいで、端正な顔立ちだった。

ハリウッド映画に、「若き英雄王」みたいな役柄でできそうな正統派の美形だ。軟弱で、城から一步も出たことないというような青白い美形じゃなくて、趣味は鷹狩り、剣の腕前は「お前、勇者か？！」と言いたくなるほど上手、という雰囲気的美形王様役として映画に出てきそうだ。

「ふーん……で、頭の上の砂漠魚をどうするか俺に聞きに来たわけか」

国王の視線が俺の頭上に向けられる。砂漠魚ときたら、得意げにきゅいきゅいいいながら、空を泳いでいる。国王は、さして考えもしないでこういった。

「いいよ。そのまま。成長したらでかくなりすぎて困るだろうけど、保護対象だからしっかり守って育ててやってくれ」

意外と、あつさりしてるな！。

「孵化した卵を育てているのは、結局人間だからな。生態を調べるために、定期的に砂漠魚の様子を知らせてくれ」

「こいつが、大人になったら群れに返すんですか？　だったら、人間が育てたら戻りにくいんじゃない」

よく言うだろう。人間の匂いの付いた鳥は育たないって。

「それは、大丈夫だ。砂漠魚は人間以上の知能の持ち主で、時が来れば群れに帰る」

人間以上って……このお気楽そつに空をふよふよ泳いでいる、こいつが？！

それ、本当かよ……

神を恐れぬ男 9

とりあえず、頭の上をふよふよ浮いている、こいつのことはお咎めなし、ということになったようだ。寛大な王様でよかった。やっぱ、良い王様っていうのは器が違うよな。

そういえば、森の奥で見つけたあの謎の空洞のクエストの報酬は、メイヒュー国王が払うことになっていたんだっけ。良い王様は、金払いも良いよな。

……まだ、成功したわけじゃないけど。

俺は、もう成功したつもりでいるがな！

あれよあれよ、といううちに、王様との面会は終わって俺たちはいつもの「砂の海」亭に戻ってきた。シェリダンからの依頼を成功させたわけだから、これからシェリダンは俺たちがやるうとしているクエストに協力してくれるはずだ。

「で、俺は何を手伝えればいいのかな？」

夕食時だったので、一通り自分たちの食べる分の注文をしてから、シェリダンは俺たちに話を振った。

どん、とテーブルにビールがおかれてロリスは一口それを飲むと、大胆不敵な笑みを浮かべていった。

「成功すれば、金は嫌ってほど手に入る。そして、王様と仲のいいあんたなら、いろいろ貸しが作れて楽しいはずだ」

頭の回転の速いシェリダンは、すぐにどのクエストに手を出そうとしているのかわかったらしく、眉を寄せて不審そうな表情をした。「こういつちやなんだが……そのクエストは難攻不落だ。誰もそこには入れない」

「俺たちなら、入れる。だが、それにはシェリダンの力が必要なんだ」

そう、ユーリスの神の奇跡で、洞窟への侵入を防いでいた不思議なバリアは取り除けた。あとは、ぼっかりと下に向かって開いてい

る穴を降りていけばいい。

「飛空艇があれば、いける」

俺の言葉に、シェリダンはふっと笑って、視線をユーリスへと動かした。ユーリスはなぜ自分に視線が向けられているのかわからな
いらしく、小首をかしげてシェリダンを笑顔で見返す。

「……いいだろう、君たちなら不可能を可能にするだろう。神に祝福された娘がいるのだから」

ユーリスのことを、そうやって呼ぶのか。神に祝福された娘、なんて仰々しい。けれど、それがユーリスをみた一般的な反応なんだろう。

ロリスはすぐに、シェリダんに洞窟の透明なバリアが解けたときの様子や、洞窟の様子などを詳しく説明した。よく、そんな細かいところをみていたな、と俺が呆れるぐらいいろんなことを正確に話している。たぶん、それがロリスの盗賊としての才能なんだろうけど、シェリダンは、ロリスの説明で状況のある程度把握できたらしく、明日の早朝にその森へ行くことにした。

「どうせ、朝早いんだから飛空艇に泊まっていくといい」

俺たちが、宿の手配をしないと、などと言っていると、なんでもない風にシェリダンが言った。

えーっ飛空艇で衣食住OKなのかよ。

俺は、てつきり飛行機みたいなもんだとおもっているから、移動するためだけの手段だと思っただけだ。

なにやら、飛行機よりも豪華客船を想像したほうが近いみたいで、個室がいくつかありそこで寝泊りが可能。ミニキッチンやバスルームなんかもあって、一通りの生活ができるみたいだ。シェリダンだけしか乗らないことが多いだろうに、よくそんなつくりにしたものだ。

俺が不思議に思っていると、飛空艇は彼一人だけで操縦しているわけではなくて、同じく空賊といわれる人たちが数名スタッフとして乗り込んでいるんだそうだ。シェリダンがリーダーとして仕事を請

け負い、その名を世界に知らしめているだけで実際は、海賊と同じように集団で飛空艇で生活をしているのだそうだ。

とはいえ、飛空艇は「樂園」の失われた技術だから、昔の人が何を考えてこんな豪勢なものを作ったのかはわからない、とシェリダンは言っていた。

俺の予想だと、金持ちが娯楽のために作ったんだと思うぜ。

飯を食い終わって、港へ行くと白銀の曲線がアーモンドみたいな綺麗なフォルムをした飛空艇が目に入ってきた。これが、シェリダンの飛空艇らしい。個人所有しているのはただ一人だけ、というのもうなずける。絶対、これ維持費が相当かかっているぞ。バイクだってガソリン代が高くて、金を食うと思ってるのに、それよりも何十倍、何百倍と大きい飛空艇の維持費がバカにならないわけがない。

飛空艇、というか飛行船って感じが俺にはする。アーモンドの形をしたフォルムの腹の部分にでっぱりがあって、そこが操縦室なんだそう。アーモンドの形をしているところが、居住スペースやらエンジンスペースなんかがあって、上のほうには外部に出れるデッキがついている。一応、武装はされているらしい。大砲が全部で四門あった。

入口は、操縦室のすぐ横からタラップが降りてきて、そこから内部へと入る。十数段ほどの階段を上って、見えてきたのは、ホテルのロビーかと思うほどのエントランスホールだった。

天井までが丸い吹き抜けになっていて、上のほうにはどういう仕組みになっているのか、宙に浮いたカッティングされたクリスタルがぼんやりと光って、シャンデリアみたいになっている。間接光の柔らかい光がホールを照らしている。床は落ち着いた赤い色の絨毯が敷き詰められている。小さな木製の台の上には、白磁の花瓶に豪華な花が飾られていた。

「すげー……」

アーモンドの形をした部分は、三階建てになっていて一階が、操

縦室への入口とエンジンルーム。二階が客室のある居住空間、三階が共有フロアとなっている。共有フロアはデッキへと通じる道がある。エントランスホールから、三階まで階段が伸び上がっているの
で、出入りはしやすい。

「部屋わけをしよう。エントランスホールを基準に左側をルウと口リス、右側をアルシエーンとユーリスに提供しよう。俺は三階に部屋がある。何かあったらきてくれ。それと……一階は、飛空挺のスタッフの居住スペースでもあるから、必要ない限りは出入りしない
でくれ」

飛空挺スタッフなんて、いい表現使ってるけど、実際は空賊の仲間だもんな……。

シエリダンの説明を、飛空挺内部の見事さに気を取られながら聞いていた。

すごいよなー。いくら、失われた技術を復活させたからって言うても、こういう内装は持ち主が好き勝手に模様替えしたんだろう。シエリダンは貴族趣味的なところが服装からも伺えるけれど、（実際に貴族なんだが）この内装なんて、まさに貴族的！ ヨーロッパの「なんとか城」の部屋の写真、とかいわれたら俺、信じちゃうね、それぞれに与えられた個室も、高級ホテルの部屋のようにだ。俺、初めて天蓋つきのベッドなんかみたよ。しかも、部屋にあるベッドの大きさは、俺が二人いても大丈夫なぐらいでかい。こんな広いベッドで一人で寝るのは、妙に寂しい気がする……。

そこらへんに何気なくおいてあるサイドテーブルとか、花瓶とか、よくわからないオブジェとかどれも高そうだ。花の模様とか、葉の模様とかいろいろ描かれていて職人の業物ですといわんばかりだ。元いた世界の俺の部屋は、この広さの半分以下だったんだけど。

部屋に窓がないこと以外は、違和感を感じない。

問題は、そんなことよりも……俺、こんな広い部屋で、しかも天蓋つきベッドなんていう慣れないもので寝れるんだろうか……。

とりあえず、お決まりのように靴を脱いで広すぎるベッドにダイ

ブ。

ふかふか。弾むよ。俺。

砂漠魚も俺のまねをして、ベッドに体を体当たりさせて笑っている。笑う、といっても声を出しているわけじゃなくて、なんか、楽しそうな表情をしてるんだよな。目が。

なんとなく、こいつの言っていることが分かるようになってきたんだ。

俺がベッドの上に座って、腕を広げるとこいつがきゅい、と鳴いて俺の腕の中に飛び込んできた。ちよっと、ざらざらしているけれどさわり心地もいい。俺が頭を撫でてやると、気持ちいいのか俺の首筋に顔をすりすりしてくる。

ああ、やっぱ、なんか、こうやって懷かれると、空飛ぶ魚でも可愛いもんなんだなあ。

いよいよ、あの洞窟に乗り込むときが来た。

洞窟の上空にくるまでは、特に何の問題も無かった。俺のいたところだと、どこかの空を飛ぶにしても、申請とか必要だったし、着陸するには管制官の誘導とか必要だろ？　そういう手続きみたいなのは要らないのか？　ってシェリダンにきいたら、「そんなにたくさん飛空艇が飛んでるわけないだろ」と言われた。そりゃそうか。

ユーリスは一度、あのバリアみたいなものを触っているの、バリアの仕組み……というか、構成されている数式みたいなものを理解しているから、次は触らなくてもある程度の距離からなら解除できるのだそう。デツキに上がれば大丈夫かも、とユーリスが言っていたので、今、俺たちは飛空艇のデツキにあがっている。

船の甲板みたいところで、柵越しにユーリスは空洞のバリア部分に両手をかざした。すぐに、バリアが数学の数式みたいなもので覆われ、光り輝いたかと思うとバリアが消え去った。

そのままゆっくりと、飛空艇は洞窟の中へと下がっていく。下を除き見ても、真っ暗で底が見えない。暗くて、深くて、奈落ってこういうものを言うんじゃないかな。

少し、気温が下がってきたのかぞくつと背筋に寒気が走った。

「なによ。怖いのか？」

アルシェーンがお決まりのように、腰に両手を当てて仁王立ちをして俺をみる。

「ちよつと寒いんだよ」

アルシェーンが、また何か言い返そうとしたところで、それをさえぎるようにユーリスの悲鳴が上がった。

「おい！　どうしたんだよ」

ユーリスは、頭を両手で抱えていまにも蹲りそう。小さな声で

「嫌だ、怖い」と何度も呟いている。俺がユーリスの肩に手を置いて声をかけても、ユーリスはまったく聞こえていないようで、いやをするように首を振っている。

「ユーリスって、暗所恐怖症か？」

慌てて走りよってきたアルシエーンに俺は聞いたが、アルシエーンは不安そうに眉を寄せて首を振った。

「怖いって言っても、この洞窟なんかあるのか？」

奈落の底に沈んでいくようだ、とは思ったけれど俺としては、周囲があまり見えないのでなにが怖いのかよく分からない。暗闇が怖いなら、この状況は結構怖いと思うけれど。

「岩肌に何か書かれてるのかな？」

ロリスは胸ポケットから、白いボールのようなものを取り出すと空中に投げた。それは、空中で光り輝いて止まった。たいまつ代わりになる光の魔法を封じ込めた魔法のアイテムだ。結構便利だから、安くて手軽に手に入る。初心者冒険者でも買えるぐらいの値段だ。

「うわ……」

ロリスは何かを見つけたのか、だんだんと下がっていく洞窟の壁面を見て声を上げた。俺は、泣きじゃくっているユーリスをアルシエーンに任せて、ロリスの方へと向かった。

青白い光が、洞窟の壁面を照らし出してる。それを息を吞んで見ているロリスを不思議に思いながら、俺は壁面を見上げた。

そこは、赤黒いインクで絵が書かれていた。教会とかによくあるような宗教画ではなくて、古墳の壁面とかに残ってるような、象徴的な絵画だ。とはいえ、神秘を感じると言うよりは不気味だ。赤黒い色の所為だろうか。

よくみると、人間らしき人が、巨大な人間のような人になにか指図を出し、巨大な人間が小さな人間たちを捕らえて握りつぶしている。また別の人間のようならしき人が、串刺しのようなことをされている。

何を意味してる絵なんだ？

「これ、なんだよ」

「神話だよ」

ロリスの乾いた声が返ってきた。

「俺たちの世界創生の神話だ。……ここまで悪意に満ちたのははじめて見たけど」

「こんなところに、誰がどうやって描いたんだよ」

「昔は、神の奇跡を使えるものがたくさんいたんだそうだ。だから、奇跡を使って空を飛んで描けるし……これは、何かの動物の血を使っただろう」

「でも、そうだとすると……ユーリスはどうしてあんな反応を」

「そりゃ、不気味な絵だけど半狂乱になるほど嫌な絵ってわけじゃない。普段冷静なユーリスがあそこまで変貌するのは何かある。」

「……神の奇跡はよくわかってないってユーリスは言ってただろ？ 逆に言つと、何が起きても不思議じゃないんだ」

ロリスが振り返ってユーリスを見つめた。ユーリスはアルシェーンに支えられて、だいぶ落ち着いてきたようだ。二人で、彼女たちにゆっくり近づいた。

「流れ込んでくるんです……神話が……光景が目には焼きつくようで……！」

神話になった元の出来事の映像が頭に流れ込んでくるのだろうか。悪意に満ちたこの壁画の元になった出来事なんて相当胸糞悪い出来事に違いない。それを、ユーリスが神の奇跡が使えるばかりに、こんなことになるなんて。

「アルシェーン、祈りの言葉だ！ お前だって、神の祈りの言葉ぐらい知ってるだろ？！」

「あんだね！ 魔術師は神の言葉に叛意を翻したことから始まったんだよ。神の言葉なんて……本当は言えないのよ」

「ユーリスが一番落ち着くのはなんだ！ 慣れ親しんだ祈りの言葉だろ？ 他にあるなら言ってみろ」

この洞窟が終わるまで、胸糞悪い壁画が続いてるんだとしたら、

ユーリスにとっては悪夢だ。なんとか脱出させないと。

アルシェーンは、唇をかみ締めて俺を睨みつけてそれから、ユーリスをみた。どこか遠くの目線でぶつぶつ呟いているユーリスを見ると、つらそうな表情でアルシェーンは言った。

「神よ」

ユーリスの呟き声が止まった。

「われら弱き人を、悪しきモノから救いし救世主よ。われらに、奇跡と平和を」

ユーリスの涙が止まった。

もう少しだ。

今度は、俺たちもアルシェーンと一緒に祈りの言葉を唱えた。俺は、この世界の生まれじゃない。この世界の神様も、神話も知らない。でも、もし……俺の祈りが通じたら。

ユーリスは、だんだんと顔色も目の輝きも元に戻ってきて、糸が切れたように甲板に倒れ伏した。

『おい、そろそろ底が見えてきたぞ』

いいタイミングで、シェリダンが操縦室から連絡してきた。どうやら、あの壁画の影響があったのはユーリスだけのようだ。

『こっちはいろいろ大変だ。甲板まで来てくれ』

ロリスが甲板にある通信機にむかってしゃべった。通信機というか……単なる長い筒が立てられているように見えるんだけど、あれで話ができるんだからどんな仕組みになってるんだか。

「どうかしたのか？」

シェリダンが甲板に上がってきて、深刻そうな俺たちの表情をみて不思議そうに尋ねてきた。俺たちは簡単に今あったことをシェリダンに説明した。

「……このまま飛空艇で行けるところまで行ってみるつもりだ。それまでに目覚めればいいが眠ったままなら置いて探索に行くしかないな」

洞窟内部に侵入しているので、敵地であるからには早く行動しな

いと、こちらが敵のわなにはめられる確率が上がるし、危険度が増すのだそう。確かにそうだけれど、ユーリスを置いていつて大丈夫だろうか。

「大丈夫だ。飛空艇はかなりの耐久力がある」

「船員たちは……ユーリスに手荒なまねをするような荒くれものだったりしないかしら？」

シェリダンはきょとん、とした表情をして次に、おかしそくに笑った。

「おまつ……まさか、ユーリスが襲われるとか考えたのか？」

「だって、こういうのは王道でしょう？！物語ではそこで王子が助けに来てくれるけど」

どんな物語をこのお嬢様は読んでるんだ？！

「安心していい……おい、野郎ども来な！」

シェリダンはピアスとしてつけている通信機にむかって叫ぶとばたばたたと船内を走り回る音がして、甲板にあつという間に人が集まった。

集まったのは、俺の背丈の半分ぐらいしかない子供と言ってもいい人たちだ。くるくる、ふわふわした髪の毛に、くりくりのきらきらした目。ちよつとだけ耳がとがっていて……。

「ホビット……？」

俺は、映画でこれに似たような人たちを見たぞ。食べるのが好きで、平和が好きで、でも本当は芯の強いすごい人たちだ。

「タン・ルシュという種族の者たちだ。彼らは人間の女なんか見向きもしないから安心していい」

アルシェーンにシェリダンはにっこり笑いかけると、アルシェーンはとたんにぼぼつと音が出るぐらいに耳まで真っ赤にした。あれは、恥ずかしいという理由だけで赤くなったわけじゃないな。

「野郎ども、俺たちの新しい仲間にあいさつだ」

よろしくだの、こんちわだの、口々に勝手に挨拶してびよこびよこお辞儀をしている。やば、すっごい可愛いぞ、この種族……！

「それじゃ、野郎ども持ち場にもどれ」

シェリダンに向いて整列すると、タン・ルシュたちは小さな胸を張って、一斉に右手の握りこぶしを左胸に当ててぴしっ^ぱと背筋を伸ばすと一斉に散らばって言った。

あれは、もしかして、この世界の敬礼って奴なのかな？

飛空艇では、行けない位に洞窟が狭まった。俺たちはその手前で飛空艇を駐留して、あとは徒歩で探検するのだと思っていた。

少なくとも、普通は、そうする。

だが、シェリダンの考えは違った。有名で金も余っている彼だからこそできることだ。

なんと、移動用の空中ボートを使うのだ。空中ボートというか、スケボーみたいな板で後ろに小さなジェットエンジンがついている。当然、宙に浮く。板の上側には、足をはめるためにわずかに溝ができていて、スノーボードの板のようだ。

この乗り物がまた、相当珍しいものらしくこういうのが大好きなロリスは目をそれこそ、純粋な子供のように輝かせてシェリダンにあれこれ聞いていた。

この得体の知れないボードの乗り方をシェリダンに聞いたところ、どうやらスノーボードと変わらないような乗り方だった。軸足で踏み込むと、エンジンが加速してスピードが出るとかそういうのは違ってたけれど。

この乗り物は例によって、楽園が合ったところの失われた技術をシェリダンが復活させて作ったものらしい。一応試験運用はパスしたけれど、実際に使うのは今回が初めてだそうだ。

…… 本当に、大丈夫なんだろうな。

「自分だけだったらよく利用はするけどな。他の奴は使ったことがないから、不具合があったら言ってくれ」

気楽に言ってくれてるが、それって俺たちを実験台にしてるってことだよな？ いきなり爆走しないことを祈っておこう。

俺は、スノーボードの板を置くようにそのプレートを地面に置いた。踏み込み用のペダルについているほうに、右足を乗せて肩幅ぐらい間を空けて左足を平行に置いた。ほんと、スノーボードだよな。

ただ、滑るのが雪か、空気かってぐらいだ。簡単に空気の上を滑るとか言ってるけど、このメートルぐらいしかない板が、何の抵抗もなく空中に浮くんだけ？

……俺の理解力を超えている。

俺は、ペダルを踏み込んで右足のつま先を三十度ほど外側に向けた。かちつとロックの外れる音がして、ジェットエンジンが唸り声をあげて動き出した。やがて、地面が揺れたかと思うと下から上へと緩やかな空気の流れを感じた。

浮いてる……！ 俺、浮いてる……！

三十センチばかりだろうか、ボードの上に乗っている俺は、ボードごと空中にいた。腰を落として膝をまげて立っている姿なんか、スノーボードと同じフォームだ。

「なかなか、飲み込みが早いじゃないか」

シェリダンがすでにボードに乗った状態で、俺に言った。その様子を見ていたロリスが、同じようにペダルを踏み込んで、ボードに乗った。宙に浮くときに、バランスを崩して少しよろめいたが、反射神経がいいのかすぐに持ち直した。

ペダルを踏み込むと前進して、踏み込みの深さによってスピードが変化するらしい。高度はこれ以上、上がらないんだそうだ。失われた技術の完全再現であれば、高度も自由自在なのだけけど、そこはまだ、シェリダンは解読できていないということだった。

ペダルの踏み込みだけの動作で高度の変化まではつけようがナイしな。別の操縦方法が存在したか、リモコンみたいなのがあったのか、そんなところだろう。

妥当というか、予想の範疇というか、アルシエーンは全然このボードに乗れないでいた。どうも宙に浮くときに恐怖心があるのか、バランスを崩して地面に落ちてしまう。それに、腰も落としてないから、うまくボードに乗れてないんだな。

「アルシエーン、腰落とせ」

俺が、アドバイスをしても、アルシエーンは、ふんつと鼻

を鳴らしてそつぽをむいた。

俺のありがたい忠告を聞けっの！

「女の子が、こういう姿勢をしないとは思っけど、こうしないこのボードは危ないよ？」

シェリダンが、大人の魅力で諭すように言うと、アルシエーンは頬を赤くして黙って頷いた。

おい、俺との違いは何だ！ 言ってることは同じだぞ。

とりあえず、へっぴり腰気味で、それらしくボードにしがみついているものの、このまま飛んで進むのは難しそうだ。シェリダンは見かねて、結局シェリダンがアルシエーンのボードを牽引することにした。

牽引といってもロープでつながんじやないんだ。レーザーみたいな光がボードの後部から出るようになっていて、それをアルシエーンのボードの先端にあてると、ロープでつながれたのと同じように牽引することができるのだ。

操縦やスピードは、全部シェリダンが行ってアルシエーンはボードに乗っているだけという状態だ。自転車の2ケツみたいなもんか？

ただ、その状態は、恐ろしく……カッコ悪い。

アルシエーンは、ボードに乗れないのが悔しいのか、かつこ悪い状態なのに気がつかないほどテンパってるのか、文句も言わずボードに乗っている。

なんで、写真ないんだ、写真！！

乗ってみると、楽しくて俺は、この乗り物が好きになれそうだ。

さすがに探索だから、ロリスを先頭にゆっくりと進んでいる。これ、探索終わったら乗り回してえ。

今までは、天然の洞窟といった雰囲気だったのに急に「整えました」といわんばかりの岩肌が変わった。

一定間隔おきに、明かりを置いたための台が設けられている。たい

まつを刺す為のやつじゃないんだよな。どっちかというと、ランタンとかろうそくとか、そういった類を置く物の様にみえるのだけけど、だからといって蠟の破片がこびりついているということはない。考えられるのは、電気スタンドを間接照明のように置いていたとか、魔法で作った明かりをおいていたとか、今のこの世界の文明では考えられないような代物をおいていたのではないか。

「すごい技術だな」

ロリスが感心したように言った。

「なにが？」

「俺のいた国では、地下にこんな建造物を作る技術はない……穴を掘ることはできても、天井をあんなに高くし、綺麗な回廊を作るなんてことは……」

そう、俺たちは宙に浮いている状態なのに、天井には届きそうもない。天井は、上のほうにあつて吹き抜け、とは言わないにしてもかなりの高さを持っていた。窓がないので違和感があるが、地下であることを忘れそうなほどの綺麗な回廊だ。

「グラン帝国にはそんな技術があるのか？」

「こんな地下神殿みたいなのはないわ。私がいたときには、地上に高い建物を建てることに興味があつたようだから」

地下神殿……確かに、そう見える。

だけど。

「こんなところにいる神様ってのは、ずいぶん寂しい思いをしてるんだろうな」

俺の呟きに、アルシエーンは、バカにしたように鼻で笑う。

「神なんていないわ」

「ユーリスがいないからといって、失礼なやつだな」

「ユーリスのアレは、彼女自身の持つて生まれた力よ。神への信仰なんかじゃない」

「だからって……!」

俺が反論しようとしたのを、ロリスの鋭い呼びかけによって中断

した。

「誰かいるみたいだ」

俺もアルシェーンも慌てて口をつぐんだ。

ちょうど丁字路になっていて左側から誰かが来るようだ。かつん、かつんと足音が岩肌反射している。

壁に張り付くようにして、息を殺しているとその人物がどんどん近づいてきて、やがてこちらに気がつかずに遠ざかっていく。ちらり、と見えた姿は成人男性で、帝国の軍服を着用していた。一般兵のようだ。

「ついてっってみるか」

シェリダンが、こともなげに言う。

「あの兵士、大事そうに何かを抱えていたからな。ついていけば、なにか見つかるかもしれない」

俺は、その姿を確認するのが精一杯だったのに、シェリダンは、持ち物まで確認していた。

「そうだな……一般兵とはいえそれなりに階級は上のほうだったから、なにか重要な命令を受けているかも」

ロリスも、階級章まで確認したみたいだ。

「尾行するのは結構難しいだろ」

足音の響くところみたいだし、俺は長剣を下げているせいでどんなにがんばっても金属の音を立てる。

「ボードに乗ったままで行けるだろう。以外と音は静かだし、エンジン音を知らないやつが多いから人がつけてるとは思わないだろう」

そんな理屈とおるのかよ！

神を恐れぬ男 12

見回りらしい兵士をボードに乗ったまま後をつける。

男は誰もいないとたかをくくっているのか、後ろを振り返りもしない。今、振り替えたから見つかると思う。でも、助けを呼ばれる前に黙らせると思っけど。ロリスが。

俺には無理だ。俺の武器は、長剣でリーチが長いとは言え、隊列は後ろの方だ。ロリスなら先頭にいるからなんとかなるだろうという期待がある。

そういえば、俺のすぐ前にいる、アルシェーンを牽引しているシェリダンは、何を武器としているんだろう。

身軽だし、腰に剣を帯びているわけではないし。魔法……てわけではなさそうだ。得てして、魔法使いというのは魔法の勉強ばかりするから、運動神経にまで、繋がっている人物は少ないといえる。

俺はそんなことを考えながら、へっぴり腰でボードにしがみついてシェリダんに牽引されているアルシェーンの後ろ姿を見つめた。

なんでカメラがないんだっ。俺なら絶対写真に納めて、メモリアルにしてやるのに。

見回りの男が角を曲がった。俺たちもそれに続く。

角を曲がると、両側全部が頑丈な牢屋になっていた。小さい声だけれど、この通路を曲がった時からずっと、呻き声がする。苦しむ声で、背筋が寒くなるような声音だ。

よくある鉄格子だけの牢屋ではなくて、木製の扉がついているから、牢屋の中がどうなっているのかは分からない。

開けたらモンスターがいた、ていうのは無しにしてほしいな。

見回りの男は、一番奥の牢屋の鍵を開けて入っていった。とたんに、女の子の悲鳴がした。

俺たちは急いで駆けつけて、問題無用で見回りの男の意識をちよつと遠くに飛び立ってもらった。

牢屋の中には、ローティーンぐらいの女の子が、俺達を警戒しながら見ている。「言葉、分かるか？」

俺が、唯一この世界で話せる共通語で声をかけた。

少しだけ、興味深そうに俺を見るが返事はない。

「俺は、ルウ。探索者だ。良ければ君をここから、連れ出すよ」

「……私は、リサ・ロゼッタ。ここに捕らえられたんだ」

ためらいがちに、リサは名前を名乗った。話し方はどこか男の子っぽい。

オレンジ帯びた金色の髪で前髪の一部をショッキングピンクに染めている。俺からすれば、変わったセンスの持ち主だ。

俺達は順に自己紹介をしていくと、流石にシェリダンの時には盛大に驚いていた。空賊シェリダンの名前は、小さい子供にキラキラした憧れを抱かせる人物のようで、リサは感激していた。

おかげで警戒心も薄れたようだった。

「ここは、帝国の実験場なんだ。はやく逃げないとマズイよ」

リサがとんでもない事を言い出した。と言うことは、他の牢屋にいるのは凶悪なモンスターってことか？もしかして、この子はその餌になるうとしていたとか？「なるほど……帝国は酷いことをする。」

これは、人体改造の薬だ」

ロリスと一緒に見回りの男の懷を漁っていたシェリダンが言った。

「まさか……」

俺は、自分のたどり着いた答えを口に出すのを躊躇った。

だって、言えないだろう。薬を飲ませて人間をモンスター化しようとしていたなんて。

「他につれてこられた人は？」

「向かいにお姉さんがいたけど、最近は泣き声とひきつった笑い声しか聞こえないよ」

俺の問いかけにリサは泣きそうな声で答えた。俺は急いで向かいの牢屋に向かった。

できれば、助けたい。

ロリスに頼んで牢屋の鍵を開けてもらい、中を覗いた。
部屋の真ん中には上半身は女性の体で下半身はアメーバになっている生き物がいた。

ひきつった笑い声をあげていたが、俺と目があうと正氣の目でか細い声を絞りだして言った。

「殺して。もう助からない」俺は何をいつたらいいのか分からなかった。v こんなときに、何を言ったら相手を勇気づけられるかなんて、学校では習わない。v 「助からないのか？」v 自分でもびつくりするほどの渴れた声をだして傍らに立つシェリダンに聞いた。

「無理だ。今の俺達では何もできない。安らかにしてやるぐらいしか。俺が止めをさす役目が変わるうか？」

俺は優しいシェリダンの申し立てに首を横に降った。

これは、最初に彼女を見つけた俺の役目だ。

俺は剣を抜いて、彼女の前に立った。せめて苦しまないで欲しいと思い、俺はサングラスを外して彼女と向き合った。

俺の顔をみた彼女は、恍惚としながらも、呟いた。

「貴方は……神の子……最後を貴方に委ねられるのは、なんと幸せなことでしょう」

俺はなんのことも聞き出したかったが、苦しむ人に鞭打つ真似はできなかった。それにかろうじて残っている衣服から、神職だとわかった。後で、ユーリスに聞くでしょう。

俺は剣先下にむけて彼女の心臓めがけて降り下ろした。

「神よ。貴方の元に優しい者が参ります。どうか貴方の元で安らかに過ごせますように」

俺はユーリスに聞いた、死者への祈りの言葉を唱えた。
何故か、涙が溢れてきた。

悔しい。あんなことをしているグランツ帝国に対して俺は無力すぎた。

こうして看取るしかないのだ。

悔しい。これは、悔し涙だ。

俺は袖で涙を脱ぐって、サングラスをかけた。

すでに通路の前では、みんなが脱出の準備を整えていた。

「行くわよ」

地面に足がついているので、アルシエーンは強気なようだ。リサを守るように立っている。

「実験場をこのままにしていくなか？」

「これ以上は手に終えない」

ロリスが言った。

「もう、国家間の問題だ。生証人と薬という証拠もあるから、あとは王様がなんとかしてくれるさ」

傍らに立つシエリダンも頷いた。国王に信頼厚いシエリダンがいるならなんとかなるだろう。あの王様は優しそうだっ

た。ロリスが先頭でシエリダンがアルシエーンを牽引し、リサもそこに乗せる。俺は最後尾という隊列で戻ることにした。

そこに、誰何の声がした。兵士が戻らないのを不振に思ったので見に来たのだろう。同じ軍服を来ていた。

黙らせようとロリスが素早く影に潜むように近づいたが、それより早く兵士に仲間を呼ばれてしまう。

呼んだ仲間というのがまた、最悪で牢屋にいるかつては人間だったモンスターたちだ。その上、通路の奥からはたくさんの兵士たちが列を揃えて走ってきた。

これって絶対絶命でやつ？！

神を恐れぬ男 13

アルシェーンとリサを守るように俺達は、背中合わせに立った。

俺の長剣の届かないギリギリのところには剣を構えた兵士が二十人ほど、半円を描いて取り囲んでいる。俺の後方にはロリスとシェリダンが構えてモンスターと対峙していた。

万事休すとならないといいのだけど。

「ルウ、タイミングを合わせて位置を代わろう。俺は多数を相手が得意の武器だ」

俺は短く返事をする、シェリダンは小さな声でカウントし始めた。

シェリダンの合図に、俺は振り返り目前にいるモンスターに切りかかった。

いわゆる、キメラというやつだろう。四つ足の生き物で頭はライオンだが背中に翼が生えていたり、尻尾は蛇になっている。

元は人間、でも躊躇ったらこちらが殺るされる。

俺の振りかざした剣は、あっさりともうひとつの首に阻まれた。

同時に、後ろで多数の悲鳴が上がった。

シェリダンが多数の兵士を相手にしていた。武器は、糸のようだ。無数の糸がシェリダンの手から無限に伸びている。

糸は意思を持っているかのように自在に動き、鋭利な刃となり兵士たちを切り刻み始めた。

俺の方と言えば、良くみて一進一退、悪く見れば押されている状況だ。

いつも援護してくれるロリスは、もう一匹を相手にしているからこちらに来てくれそうにない。アルシェーンは、呪文を唱え始めたばかりだ。

すると、見かねたのかリサが倒れた兵士から剣を奪い取り、俺の横に躍り出た。

「お、おい」

俺が慌て声をかけると、リサは得意気に笑った。

「足手まといにはならないよ」

剣を片手でもち、左手のひらを剣の刃にかざし、剣の根元から剣先に滑らせた。

するとかざしたところから、剣が炎を帯びていく。

兵士が使っていた普通の剣が、今は炎の剣に早変わりだ。

俺より強いんじゃないか？

リサはあつという間に、キメラとの距離を詰めて炎の剣を降り下ろした。俺より全然、フォームが綺麗だ。ちゃんと剣術を小さい頃から習ってる感じがする。

これじゃあ、俺が足手まといだ！

肉の焼ける匂いがする。キメラの体毛も一緒に燃えるから、香ばしい匂いとは言えない。硫黄臭い。

キメラが咆哮を上げた。大きく空いた口めがけて、アルシエーンは完成した炎の魔法を放った。

こういう、えげつない攻撃をアルシエーンは容赦なくやるから、気質はDSだと俺は思っている。

さすがに、口内への炎の魔法はキメラに痛手を与えたようだ。

だが、相手は人工的に作られたモンスターだ。強化されているらしく、すぐに体制を立て直して俺とリサを飛び越して、アルシエーンへ向かおうとした。

アルシエーンの前にキメラは降り立ち、前肢の長い爪でアルシエーンを刻もうと降り被る。

俺は、アルシエーンでキメラの間に割って入った。

さすがに受けきれなくて、俺の頬をキメラの爪がかする。ヒーロミみたいな慣れないこと、するもんじゃないな。

「突破口を作る。合図したら、ルウ、アルシエーン、ロリスの順で行け。ロリスがリサを連れていけ」

シェリダンが殿をつとめるのだという。いうやいなや、シェリダ

ンはアルシェーンの牽引を解除した。

俺が一番最初なのは、シェリダンでは切り結べなかった者たちを、俺が引き受けるためなのだろう。

その時、俺に天啓が訪れた。

サングラス外したら、楽しいことになるんじゃないか？

トカゲ野郎でさえ、恍惚とする俺の顔。こういう時以外のいつに役立つというのだ！

俺はおもむろにサングラスを外した。

思った通り、俺を見ていた奴等は、恍惚とした表情になる。

その一瞬の油断をシェリダンが見逃すはずがない。合図の音が高らかに響いた。合図にあわせて、俺は走り出した。目の前にいたキメラは俺の顔に見惚れたものだから、シェリダンの強烈な攻撃を避けることができなかった。咆哮をあげてよろめく脇を、俺はボードのペダルを踏み込んで飛び出した。剣を構えて、牽制しながら飛空挺のあった場所まで走り抜ける。

次々と、俺の顔を見て怯んだり、腰を抜かしている人たちを見て「膝まづけ、愚民ども」とかいう台詞が思いつかなくも無いが、よく考えると、この状況って本当に微妙。

俺の顔っていったい、なんなわけ？

顔が良かったら、彼女とかできるんだろうなあと思っていた俺に、異世界の神様がプレゼントしてくれたわけ？

俺としては、女の子からキヤーキヤー騒がれて、美人のあの子ども可愛いあの子ども俺のもの！　　ハハ！？　後空白　　っていう状況にイケメンになれば、なれるんだろうな、と思っていたわけだ。

こんな、人間離れた美形なんて、想像もしてなかったね。

大体、これだと顔も見れない醜い顔立ちとなんら、変わるところが無い。美醜紙一重だ。

後方から、仲間たちがついてきているのを確認するために、俺はサングラスをかけて振り返った。

あれほど、嫌だと言っていたアルシェーンが腰を下ろして必死の

形相で、俺の後についてきているし、ロリスはリサをおんぶしてボードに器用に乗っていた。殿のシェリダンも俺たちの様子を伺いながらついてきている。このまま、一気に非空挺の乗り場まで飛翔しても問題なさそうだ。

狭かった地下通路を抜けて、だだっ広い地下神殿へと戻ってきた。ここから、飛空挺まではあと少しだ。小さく飛空挺が見え始めた。「やばい、追いつかれるぞ」

殿のシェリダンが全員に注意を促す。

ボードで飛んで逃げているとはいえ、足の速いモンスターなどは俺たちを捕捉しようとしていた。しつこい奴らだ。

「迎え撃とう」

飛空挺のほうまで行って援護射撃を頼むことも考えられたが、どこまで援護してくれるかわからないし、切り札は最後まで取っておきたい。幸い地下神殿なら、広いし高さもあるので、戦闘にはもってこいだ。

俺の言葉に、ロリスに背負われていたリサが、ボードの上で踏み切って追いかけてきたキメラに向かって飛び上がった。空中で剣を抜いて呪文を唱えながら、左手で剣の端をなぞる。

瞬く間に、剣には炎が宿り燃え上がった。リサは、頭上に振り上げた剣をキメラに振り下ろす。

リサが着地すると同時に、キメラが燃え上がる。真っ赤な炎をバックに右手に剣をもってゆっくり立ち上がる姿は、金髪が炎の光に反射して王冠をかぶっている様に見える。

なにあれ、俺よりヒーローだよ。

その隙にロリスが、燃え上がったもなお生きているキメラに弓で牽制する。

おっと、俺もぼうつとはしてられない。剣を抜いてリサの横に並び立った。

咆哮を上げて、前足でなぎ払おうとするキメラの爪をよけて、俺は胴体へ剣を突き刺した。確かな手ごたえを感じて体全体を使って、

剣を引き抜いて後ろに下がった。飛び掛る姿勢だったカメラがその場に崩れ落ちて動かなくなった。

「どうやら倒せたみたいだ。」

俺たちは、すぐに全速力で飛空艇めがけて駆け抜けた。

俺は飛空艇のまえで、ボードを降りた。その横をシェリダンが発進準備の指示を出しながら入り口のスロープを駆け上がったいく。俺たちはその後に続いて、次々と飛空艇に乗り込んだ。

「キャプテン、いつでも発進できます」

飛空艇にはいると、子供の甲高い声がした。スタッフのタン・ルシュの誰かが通信機で知らせてきたようだ。

「進路、メイヒュー城にあわせろ。最大船速。発進！」

シェリダンの命令に、「了解」という返事が聞こえた。

エンジン音が大きくなると、体の中に浮き出すようなふわっとした感覚に襲われる。そのまま垂直方向に飛空艇があがっていく。

「さすがに追いかけてはこないみたいだな」

シェリダンの一言で俺は、安心した。空を飛ぶモンスターはどうやら、あの中には含まれてなかったようだ。

「私は、ブリッジで指揮をする。各自、休憩していてくれ。疲れただろう」

入り口のホールでモタモタしていた俺たちに向かって、シェリダンはいうと颯爽と長い上着を翻して下の階にあるブリッジに向かった。

「とりあえず、ユーリスの様子でも見に行くか？」

俺の言葉にロリスは頷いた。

「リサもおいで。俺たちの仲間が具合が悪くて寝てるから、見舞いに行くんだ」

すっかりリサはロリスになついたみたいで、ロリスの誘いにリサはうれしそうに頷いた。

ユーリスは元気だろうか。

あの取り乱した様子のユーリスが少し気がかりだった。今までにないぐらいの取り乱し方だったし……それに

俺は、あのときを思い出していた。俺のことを「神の子」といったあの人。

ユーリスなら知っているんだろうか……。

ユーリスの部屋は、俺の部屋と変わりがない。居住スペースは、すべて同じ作りにしてあるのだろ。同じように貴族が住んでそうな部屋だ。

部屋にひとつだけ備え付けてあるベッドでユーリスは、寝ていたようだ。今は俺たちの訪問で、枕を背にして上体を起こしていた。

「気分はどう？」

アルシエーンが尋ねるとユーリスは、いつもの様に優しい笑顔をみせて大丈夫であることを伝えた。

ユーリスの顔色は、若干青いものだいぶ落ち着いた様だ。落ち着いているところに、先ほどの気を失いそうなほどの出来事を思い出させて良いのか俺はためらう。

他の奴らも同じ考えらしく、ユーリスに問いただそうとはしない。

「新しい仲間が増えたんだ」

ロリスが、背中に隠れるようにして立っているリサをユーリスの前に押し出すようにした。

リサは、たたらを踏んで恨みがましそうにロリスを睨みながら前にでた。

人見知りをするなんてキャラだったか？

妙に恥ずかしがっているリサは、ユーリスの前に立って小さな声で挨拶をした。

「なに恥ずかしがっているんだ？」

俺は不思議に思ったので、リサに尋ねる。

「私の町には、女の司祭様がいなくて。とても、尊い方だから仰々しいよくしと爺ちゃんが」

？俺の身近には、そういう人がいなかったから分からないが、聖職者というのは一般的に尊敬を集めるもので小さい頃からそのようにしつけられるらしい。

「ユーリスは、初めて会った時から仲間だったから敬語で話すこともしなかった。そもそも、聖職者だと最初から知っていても敬語では話さなかったと思う。俺は、共通語で尊敬語を使って堪能には話せない。」

「リサ・ロゼッタと申します。司祭様」

「敬虔そうな表情で、リサは言った。俺と話している時とは大分違う顔だ。」

「そのようにかしこまらなくてください。先ほど、ロリスがリサを『仲間』だと紹介しました。ルウや、ロリスたちに話すのと同じように、気軽に話してくださいね」

「ユーリスの立場はリサから見れば憧れなのだろう。素敵なお姉さんの雰囲気によられて、リサは目をキラキラさせて頷いていた。」

「ユーリスの凄い所は、神聖魔法ではなくてこういう、誰でも親しみやすく感じさせることだと思う。俺だったら、こうはいかない。」

「ちょっと訊きたいことがあるんだ」

「俺は、地下牢にいた女性の言葉の意味をユーリスにきいてみようと思う。」

「ユーリスは、俺に顔を向けた。」

「神の子ていうのは、一般的にどういう人物なんだ？」

「俺の質問にユーリスは、困った表情をした。世間一般の常識なら、アルシエーンの鋭いツツコミが入るのだが、それが無いということはアルシエーンも知らない宗教用語なのかもしれない。」

「一般的と言われますと、困りますわ。私の信仰している宗教では、神の子と言うのは、神子と申しまして神から祝福された存在だと言われています」

「神の子である証と言うのは？」

「この世に生きているものは、みな神子です。祝福を受けない者などいません」

「ユーリスの話だと、先ほどの女性の言葉は、単なる宗教的な」

祝福の言葉のひとつも取れるのか。

「というのが、教えを解く時の話です。神子の証は、稀なる力、稀なる容姿であると言われています」

「??? ユーリスの答に、ロリスが俺に視線を向けた。ユーリスも何か言いたそうにしていたが、それを飲み込んだようだ。」

「あの洞窟の先は、地下牢になっていた。リサとはそこで出会った。助けられなかった女性に、俺は『神子』だと言われた」

「??? アルシェーンとリサが、驚いたように俺を見た。アルシェーンなんか、不信そのものの目付きだ。」

「単なる感謝と祝福の言葉じゃないの?」

「??? アルシェーンは、力いっぱい俺を否定している。しかし、ユーリスは黙ったまま俺をみた見つめていた。その沈黙に、アルシェーンはユーリスと俺とを交互に見ている。」

「??? ロリスが、やれやれと言わんばかりにため息をついた。」

「ずっと、いつか言おうと思っていました」

「??? ユーリスが、言葉を選びながら言った。」

「ルウは、神子である可能性が高いです。なにか稀なる力を秘めているはずです」

「??? ユーリスの言葉に何故かアルシェーンが悲鳴をあげて驚いていた。」

俺は、飛空艇のデッキで砂漠魚のツナと風に当たっている。

突然のユーリスの「あなたは、神子かもしれません」宣言に、俺以上皆が騒いでいた。アルシェーンは、何かの間違いだとうるさかったし、リサは俺のサングラスを無理矢理引き剥がそうとする。ロリスは、うすうす勘付いていたのか、ユーリスから詳しい話を聞きたがっていた。

俺は、正直どちらでもよかった。神子であることで、元の世界に帰れるのなら神子でもなんでもなつてやるが、たんなる珍獣扱いならゴメンだ。

？俺の懐にいるツナが心配そうに俺を見上げた。これから、しばらく一緒にいる事になるから、保護した砂漠魚に名前をつけた。俺が分かる魚の名前はサケ、マグロ、サンマ、タイぐらいだ。名前として今ひとつと思って、魚加工食品の名前にした。

？ツナってかわいい名前だと思う。

？ツナは、頭が良いらしく、自分の名前が「ツナ」である事を自覚している。俺が呼べば返事をするのだ。

？デッキの上では飛ばされるので、俺の懐にいる。犬や猫と違って、懐にツナを入れても暖かくないのが残念だ。このザラザラした分厚い皮が体温を感じさせないのだろう。

？？粒らな瞳が見上げてきて可愛い。

？？結局、神子かもしれないとわかったところで、今すぐどうこう変わる訳では無かった。本当に神子だとしても、何の力があるのか全く分からないからだ。

？？？風に当たってぼんやりしていると、シェリダンが館内放送を流した。

「もうすぐ、メイヒュー城につく。各自、着陸の準備に入れ」

？？俺は、ツナを、懐にいれたままデッキから室内へと移動した。

???メイヒュー城のすぐ側に着陸するのは割と良くある事らしく、城のスタッフの人たちも慌てずに俺達を誘導している。

???後でシェリダンに聞いたのだが、スタッフの何人かが所謂、管制官のような案内を着陸時にしてくれるのだと言う。

???誘拐事件の被害者を連れていているというのは、すでに連絡されているようで救護スタッフが急いでやってきてリサを抱えるように連れて行った。

???俺達は、以前も通された王様の謁見の間まで連れていかれた。同じように、玉座から一直線に伸びる赤い絨毯の上を歩いて、玉座に座る国王に一礼する。

「皆、元気そうで何よりだ。早速だが報告してもらおう」

???シェリダンは、王様の言葉に答えて、立ち上がって事件のあらましを話し出した。

???説明の仕方もありやすいし、誇張がない。こういうのは、手柄に繋がるから多少、自分の功績というのは誇張するものだ。

???それが全くないと言うのは、王様が重用するのも分かる気がする。

???一通りシェリダンは、説明会し終わると重い沈黙に包まれた。???俺としては、シェリダンが俺の顔の異常さについて、黙っていてくれた事が嬉しい。

???俺の異常な美貌に利用価値があると思われたら、権力争いに巻き込まれそうだしな、とまるで傾城にでもなった気分だ。

「だいたい、分かった。助けた少女は、事情を聞いた後故郷に帰すつもりだ。その時は、また世話になる」

「研究所は、どうするんですか？」

???アルシェーンが、尋ねた。

「それは、こちらで対処しよう。ご苦労だった。褒美をとらせよう」

??現金なもので、
気前のいい提案に俺たちは声を上げて喜んだ。

神を恐れぬ男 15 (後書き)

11/2 誤字を修正しました。

メイヒュー王からもらった褒美の額はしばらくは何もしないでも生活できるだけのお金だった。

金額もさることながら、一番の収穫はコネだろう。一国の王と、生ける英雄と知り合いになれたのだ。今後のことを考えたらお金では買えないもだ。

リサは、養生のためにしばらく城に滞在することになったし、国王からも俺たちが城に滞在する許可をもらった。シェリダンは、飛空艇のメンテナンスをするために同じく王城に滞在する。

今のうちに、普段は手に入れない情報を手に入れておく必要があるだろう。ロリスと俺は、連れ立って城内を散策している。

しばらくは、食うに困らないとはいえいざってときに何もストックがないのは怖い。

俺は、できれば世界を渡る方法論を知りたいがそのものズバリの情報というのはいないんじゃないかと思う。

唯一、近そうな話題がユーリスの神様の言葉だが、伝説すぎる。実際にあった何かを例えているとすれば、それは巧妙に隠されているだろう。

仲間たちと飛空艇のメンテナンスをしているというシェリダンの様子を見にきた。何か面白そうなネタを持っていそうというのもあるが、飛空艇にも興味がある。

シェリダンは、飛空艇のエンジンルームでタン・ルシュの誰かとメンテナンスをしていた。

俺たちがエンジンルームに入ると、顔はエンジンに向けたままシェリダンが声をかけてきた。

「何か用か？」

「面白い話はないか？」

交渉ごとはロリスに任せてあるので俺はロリスにその場を譲る。

「金儲けになりそうな話しはないが……帝国軍がまた侵攻を開始したらしいな」

アルシェーンの故郷であるグラン帝国は近年、あちこちに侵略戦争を起こしている。

「？ 駆け出しの俺たちは、戦火を避けながら旅を続けている。

「今回はどこだ？」

「ロリスも眉根を寄せて聞いている。場合によっては、旅のルートを変える必要があるからだ。

「さあ、そこまでは。ベルモンド将軍がでて来たからには、相当力をいれているな」

「誰だ？ベルモンドって」

「相変わらず俺はこの世界の有名人を覚えられずにいる。

「ティナ・ベルモンド。グラン帝国の常勝将軍で、皇帝の秘蔵っ子だと言われている」

「ティナってことは、女か」

「女将軍だなんて、どんだけ敵ついんだろう。これが小説とかなら、ものすごい美人で、異世界から来た敵対する主人公と恋に落ちたりするわけだか……」

「想像して途中でやめた。仮に美人だったとしても、俺と恋に落ちるのはまかり間違っても無さそうだからだ。

「神子だとかいうのなら、今頃ハーレムぐらいになっている筈だ。

「こういうことが上手いかないなんで、なんだか虚しくなった来た。

「？ 俺は無邪気に体をすり寄せてくるツナの頭を撫でた。

?? ティナ・ベルモント將軍は、グラン帝国屈指の戰略家として有名らしい。ベルモント家は、グラン帝国では貧乏貴族と言ってもいくらいな落ちぶれていて、かろうじて貴族の列に加えられているという状態だったという。

?? ティナが貴族の令嬢にしては珍しく軍人の道を歩み始めた時から、快進撃が続く。

?? ちょうど帝国は、領土拡大のため他国に侵攻しており軍人の活躍の場が飛躍的に増えたのが重なったお陰で、戦場に出れば功績を立てて帰還するティナは、うなぎ登りに昇進していった。

?? 剣を握らせば、一流。指揮官になっても、一流。オマケに誰もが認めるほどの繊細な容姿に月の女神の渾名が付くほどらしい。

?? 戦場では、味方から勝利の女神と崇められるほどのようだ。

「美人というならあつて見たいな」

?? 無邪気に俺が感想を言くと、シェリダンが苦笑した。

「一度だけ、姿を見たことがあるが大層な美人だったよ。独身らしいから、人気もかなりのものだしな」

?? 輝く金髪に、草原のような瞳だそう。いかにも美人という容姿が期待できそう。

?? 最も、会うチャンスは戦場ぐらいだから会わないほうが身の為かもしれない。

「じゃ、俺達は行くよ。何かあったら教えてくれ」

?? ひとしきり、美人將軍について話した後ロリスと連れ立って飛空艇を後にした。

?? シェリダンも気のいい奴だから、今後も一緒に旅を続けたいけど、レベルが違いすぎるから無理なのかな？

?? 俺は、城の中庭に駐留している飛空艇を振り返って見た。

?? 昼間の暑い陽射しが、飛空艇に晩酌してピカピカと光っていた。

?? 続いてやってきたのは、リサが養生している城の一室だ。
??? 俺達が騒がしく賑やかにやっているの、リサは少し離れた所に部屋をあてがわれて居る。

?? そんなにうるさくした覚えは無いんだけど、アルシェーンの悲鳴がうるさかったり、アルシェーンの怒鳴り声がうるさかったりするからなあ。

?? なんだ、全部アルシェーンの所為じゃないか。

?? 一応、レディだのオトナの女の子だの小うるさいことを、リサは言っていたので扉をノックした。

?? 以前、扉をノックしなかったら痴漢とか変態とか言いたい放題言われた。???? 扉をノックする習慣が無かったのだから許して欲しいところだが、全く聞き入れてもらえなかった。

?? 部屋の中から、リサの元気そうな声で返事が聞こえた。

?? 扉を開けると、大人しくベッドで寝て居るのかと思ったら、出窓から中庭を見下ろして居る。

「何やってるんだお前」

?? ロリスが呆れて、リサを注意した。

?? リサは、人差し指を口の前に立てて、静かにして下をみると言っただ。

?? 俺とロリスは言われるまま出窓から中庭を見降ろす。

?? そこには、メイヒュー王と、美女が物陰に隠れるように親密そうに向かいあって立っていた。

「出歯亀とか、やめとけ」

?? 中庭にいる二人に聞こえるわけではないと思うが、俺は声をひそめて言った。

「だって、王様いつも連れてくる女の人が違うんだよ」

??? ちよっ………なんと羨ましい状況なんだ！

??? 確かに、男俺でも女にモテるだろうなと思うような容貌だし、

一国を治めている自信の様なものが満ち溢れている。

「???落ちない女は居ないと思うが、せめて年頃の女の子前では自重して欲しかった。」

「何度も会う人と、一回しか会わない人とかいるんだけどね」

「???リサときたら、よく観察しているようだ。」

「それなら、興味を持ってもしかたないかな。王様のペンダントはここからよく見えるし」

「???ロリスが賛成するとは思わなかった。リサが喜色満面の笑顔を浮かべているかと思ったが、蒼白になっている。」

「どうしたんだよ?」

「どうして気がついたの?」

「???俺の心配を他所に、リサはロリスを詰問した。穏やかで明るいリサには珍しく厳しい表情だ。」

「俺は職業柄、他人が身につけている装飾品を値踏みする癖がある。変わったペンダントをつけているな、と思ったよ」

「???なんだよ。全く話が見えないぞ。」

「???俺が、置いてけぼりにされている事に気がついたロリスが、深い溜息をしてリサを見下ろした。」

「???リサは、黙って頷いて首元からペンダントを取り出した。」

神を恐れぬ男18

リサは、首からいつも下げているペンダントを俺たちにみやすい様に、外した。

不思議なかたちのペンダントトップがついている。花のかたちをしたペンダントトップを、四分割して組み合わせの確認ができる様に分割した部分をパズルにしてみたいた。

「これは、私の出生を知る手がかりになるペンダントなんだ。育ててくれた爺ちゃんが言ってた。籠と一緒に入れられていたって」
籠と一緒に入っていたという事は、リサは捨て子なのか。

「このペンダントトップ、不思議でしょ？四つ組み合わせると花の形になるんだ」

リサは、明るく話していた声を潜めて続けた。

「王様が同じ物を持っていたの。……もしかしたら、と思って」
唯一の肉親の手がかりと同じ物を持っていたら、気になってこっそりと見もする。

だから、リサはバルコニーから中庭を盗み見ていたのだ。隣に連れて歩く女性の顔を覚えてしまうほどに。

「本人には聞いたのか？」

「聞けないよ。まるで、王族の身分が欲しいみたいに見えるでしょ」
私が欲しいのは家族だから、とリサは呟いた。少し大人びた笑顔をリサはみせた。

「気になるなら、俺たちが聞いてやろうか？王様が、いつも同じ装飾をつけてるのは珍しいからな」

ロリスは、リサの聞きたくても聞けない事を変わりに聞いてやろうと提案した。本当のことを話してくれるかはわからないが、今の様にこっそり伺うだけでは分からないことだってあるはずだ。

「いいの？」

「リサには助けてもらったしな」

俺は気軽に返事をする。

「だって、信じてくれるの？」

「家族が欲しいって呟くのを、信じられないわけないだろ」

どうも、俺もロリスもリサの前では良い兄貴分でいたいみたいだ。

いつもは吹かせない兄貴風をふたりでぶゆうぶゆうに吹かせている。ユリスがみたら、呆れてそうだ。

「ありがとう。そんなこと言ってくれるとは思わなかった」

リサはまるでひまわりのような笑顔をみせた。たまに、兄貴風を吹かせるのはこそばゆくて、少し胸のあたりが温くなる。

「リサはどこに住んでるんだ？」

「メイヒュー王国の西側にある、マギという小さな村だよ」

「マギ、だなんて聞いたことないな」

？職業柄世界中の街や村の名前と位置を覚えているロリスが知らないと言っからには、相当小さな村に違いない。

「何もないからね。畑ぐらいいかな。遺跡もないから冒険者は来ないし」

？本当に、どがつくほどの田舎のようだ。牧歌的なヨーロッパ風の村を俺は想像した。

？しかし、冒険者が来ないというのにリサはあんなに剣の腕があるのか。武者修行のために近くの街で修行でもしてるのだろうか。

「魔法剣なんてどこで習ったの？」

？俺と同じ事を思ったのか、ロリスが尋ねる。リサは、落ち着きなく手を動かしながら答えた。

「近くの街で教えてもらってるの」

「辺りは畑しかないような、ど田舎なんだよね？」

？いかにも何かを隠してます、と言わんばかりのリサの態度にロリスは容赦がない。

「そ、そうだから、街まで遠くて結構大変で」

「なんて街？魔法剣を使える人なんて限られてるから、聞けば分かるかも」

？この質問がリサに取って都合が悪い質問だというのは、リサの顔がまた青くなつていくのでわかった。隠し事のできないタイプのようだ。

「ロリス、言いたくない事の一つや二つ誰だつてあるだろ？良いじゃないか、リサはど田舎に住んでるけど魔法剣を習える先生が近くにいてるってことで」

？俺がそういうと、リサはあからさまにほつとした表情をみせた。

「ルウがそういうなら、まあ、いいけど」

？ロリスも流石にリサを困らせるつもりは無かったのか追求するのをやめた。俺たちはそのあとこの城での生活の話を少ししてリサの部屋を後にした。

「ルウ、本当に良かったのか？」

「何が？」

「魔法剣を使える人てことは、かなり魔法に精通してるんだ。もしかしたら、世界を渡る方法を知ってるかもしれない」

そ、そういう大事なことは早く言えって！

リサが、魔法剣を誰に習っているのか知られたくないというのは、わかった。

問題は、なんで知られたくないかだ。

魔法剣は、魔法使いとしての才能と剣士として修行しないことには使えるようにはならない。たとえば、俺が魔法剣を使いたいと思ったら魔法の素養を引っ張り出さないとイケない。

最も、ロリスと彼の実家で暮らしていた頃魔法の素養を、もっているか調べて貰ったがまるで無いということとはわかってる。俺は、どんなに頑張っても魔法剣は使えないわけだ。

魔法剣を俺から見れば自在に使っているリサは、とても優秀な才能に恵まれているのだろう。

その才能に気がつき伸ばすことができた師匠はすごいと思う。突然、教えるからには、師匠も魔法剣の使い手に違いない。

師匠もあまり使い手がいなそうな魔法剣が使えるということは、誰であるのか特定しやすいだろう。

もしかしたら、その師匠は何らかの事情で名前を人に知られたくないのかもしれない。

特に帝国なんて良くわからない法律とかあるんだから、他の国だって俺からしたら色々変わった法律があるに違いない。

「魔法剣を無闇矢鱈と教えるのを禁ず」とか、「。。。国人以外には教えるべからず」とか。

ありそうだ。

「世界を渡ったのは、プティマ神だろ？魔法で世界が渡れるのか？」
プティマ神の経典には、世界を渡ったときのことが記述されているらしいから、世界を渡る方法は神聖魔法ではないのかと、俺は思っていた。

「蛇の道は蛇というし、何か知ってるかと思って」

「リサが隠したがるくらいだな」

「リサが隠してるのはたぶん……別のことじゃないかな」

ロリスは、暫く考え込んでいるようだったがやがて首を振った。

「なんとなく予想はつくけど、リサが俺たちに話せないなら仕方ないだろうな」

「？俺は、ロリスが何に気がついたのかわからなかった。ロリスは、職業柄が人の機微に聡い。所謂、空気の読めるやつだ。」

「？方や俺はというと、世界を知らないせいもあるが空気を讀まないことに関しては他の追隨を許さない。みんな、空気読みすぎなんじゃないのか。」

「リサは、飛空艇で故郷に送ってもらうんだろ？そんなとき、なんか分かるかもしれないし」

「？確かに早く元の世界に帰りたんだけど、誰かの嫌がることをしてまで帰ろうとは思わないな。」

「？この世界生活が、そんなに辛いものじゃないとわかりはじめたからかもしれない。」

「？俺たちが暇をどうやって潰そうかとしていたら、噂の若き国王陛下が向こうから歩いてきた。中庭をみながら歩くことのできるこの回廊は、好ましいと思う人が多いみたいで色々な人を見かける。ああ、君たちは……元気にしてるかい？」

「？一応、身分は遙か上の人なのでロリスに習って廊下の端に寄り、壁と平行に立って頭を垂れた。身分の高い人が通り過ぎるまで頭をあげちゃいけないんだ。」

「？高貴な人を許可なく見ると目が潰れるんだそうだ。」

「？俺のいた世界では、信じられないような風習だな。最も、百年ほど前なら当たり前のことかもしれないけど。」

「？通り過ぎるのをまっていたら、王様ときたら身分に関係なく気さくに超えをかけてきた。」

「陛下のおかげを持ちまして、すっかり傷は癒えております」

?? ロリスつてば、そんな話し方できたのか！と、俺を感心させるほどの流暢なしゃべり口で王様に返答した。

「そう硬くならないでくれ。君たちは、俺の客だ」

?? 王様のお許しも出たことで、俺達はようやく頭を上げた。

「何か、ご用でも？」

「神に愛された娘が、古い洞窟絵を見て体調を崩したと言っていただろう。書庫に関係のありそうな書物があつたから閲覧するといい」

「ありがとう」

?? ロリスは、あっさり礼を言っていたが俺はこの国の文字が読めない。全くというわけではないが、そんな大層な文献に書かれている文章は、お手上げに違いない。

?? 俺は、ため息について意気揚々と書庫へ案内する王様の後について行った。

神を恐れぬ男20

??王宮の図書室というのは、かなり大きい。図書館と言ったほうがしっくりくるほど部屋は大きいし、沢山の本で埋め尽くされていた。

??王様は、図書室のスタッフが一礼するのを頷いて応じる。

「持ち出し禁止区域にあるんだ」

??王様は、入り口より少しだけ奥まった所にある本棚目指して歩いている。薄暗い部屋に、インクの匂いがするのはこの世界の図書室でも同じらしい。

「これが、神話の研究書、こっちが古代史。両方とも載っていたよ」
??王様が本棚から持ち出して、閲覧用の机の上に広げてくれたのは二冊の分厚い本だった。

??一冊は、モスグリーン色の地に金色の装飾が付いている。もう一冊は、赤褐色の地で同じく金色の装飾がついていた。

??うん、見事に読めない。

??たぶん、モスグリーン色がが神話なんちゃらって書いてあって、赤褐色のがなんちゃら歴史と書いてあるみたい。

??俺の識字能力では、図書室では役に立たなそうだ。

??ロリスは、何かを言いたげに俺を見た。

??分かってる。俺は読めませんよ。

「滞在中は、ここの出入りは自由だ。何か分かったら教えてくれ」

??王様は、和やかな笑顔をみせて図書室を去って行った。

??ロリスは、神話の本と思われる表紙をめくってパラパラと中を見始めた。

「これは、市中には出回ってない研究書の類だな」

「パラパラ見ただけで分かるのかよ」

「市中の出回り品なら、印刷で大量生産するから手書きってことはないだろ？」

?? ほら、と言ってロリスはページを繰ると繊細なペン字がびつちりと書かれたページが現れた。

?? 手書きの本なら、部数はそう出てないだろな。

?? コピー機があるなら別だけど。

「絵まで描いてあるね」

?? ロリスが押さえたページには、あの洞窟で見た絵とは違い、地面に大きな柱が立てられていて、その上に人が直立している絵だった。

「これが、ユーリスも話していた世界を渡った神話だよ」

?? ロリスの何気なく告げられた言葉に俺は息を飲んだ。

「ここに、世界の柱があるだろう。柱を超えて、世界を超えて行つたんだ」

「じゃあ、この人はプティマ神つてことか？」

?? 柱の天辺に立っているのは、一步向こうに踏み出せば、もう一つの世界で、踏みとどまりこちらにくれば元の世界という調度中間地点だ。

?? イラストでは、その人物が新たな世界に踏み出そうか、戻ろうかまさに決めようとしている一瞬の表情を描いている。

「世界の柱って物理的なものなのか？」

?? ユーリスは、光の柱と言っていたから魔法みたいな不思議な力を使つたのだと思っていた。

「さあな。この本にも世界の柱がなんなのかは書かれてないな。『ある日、世界の狭間で、光る世界の柱を渡り次の世界へと向かった』としか書かれてないからな」

?? 世界の狭間に、あらかじめ光る柱があつたのか？それとも渡ろうとした人が柱を立てたのか？

?? もっと読まないで詳しいことが分からなそうだが、俺には読めない。

?? もどかしい！

「お、あつたあつた」

?? ロリスは、パラパラとページを捲りあの洞窟でみた巨人が人をはしらに括り付けて丸焼きにしている絵の描かれたページを開いた。

「暗くてよく見えなかったけど、こんな絵だったんだろうな」

?? 柱に括り付けられている人は、諦めた人、もがいている人、泣いている人、いろいろな人たちがいて巨人は一人が品定め、もう一人が手に柱を持って人を焚き火に近づけようとしていた。

?? やっぱり、不気味な絵だな！

??

神を恐れぬ男21

「この神話の話を教えろよ」

俺は、さっそく本を読み始めようとしていたロリスに言った。

俺は、字が読めないから話しのあらましすら解らない。ある程度話しがわかれば、何か調べられるかも知れないだろう。

「お前は、知らないんだっただな」

どうやら、この神話は比較的誰でも知っている有名な話らしい。

小さい頃、親や乳母などから語られるのだそう。

俺だったら、むしろむしろ食われる話なんて、小さい頃に聞いたら確実にトラウマになると思う。

「悪いことをすると、巨人が食べにくるぞ、と大人はいう訳だ」

つまり、俺のいた世界だったらさしずめ鬼や悪魔の類をこっちは巨人でたとえているんだな。

ロリスが話してくれた神話の内容は、こうだ。

昔、世界には樂園のような世界だった。そこは、人が巨人を使役し、便利な生活をしていた。やがて、行きすぎた文明は、巨人に反抗の精神を植え付けた。巨人は、人を捕まえ頭から食べ始めた。このままでは、人の世界が終わってしまうと、誰もが絶望した時、一人の救世主が現れた。名前は無い。後に、プティマと呼ばれる神の子が、巨人の蛮行を止め世界を救った。

「巨人が最初から悪い奴ってわけじゃなくて、人が悪いんじゃないか」

使役だの言っているが、つまり奴隷だろう。

「巨人は、魔法で創り出したものだから、便利な道具と誰もが思っていると思うよ」

巨人というよりは、ゴーレムに近い存在なのか。

「そのプティマが世界を渡ったのか？」

「そういうこと。世界を平和にしたら、役目は終わったとばかりに

世界を渡つたらしい。疑わしいけど」

小さい声で、ロリスは最後につけたした。

「疑わしいって？」

「うまくできすぎている。騙りだろうな」

名前の無い身分であったプティマが、巨人を、倒し英雄に祭り上げられて、一番面白くないのは誰か。その当時の為政者たちだろう。上手いこと言つて、国に居られなくしたのかもしれない。

プティマは、ブツダというよりイエスに近い神様なんだな。為政者に殺されたかもしれない所は特に。

？すると、世界を渡つたとかいうのも騙りかも知れないわけか。

？つて、帰れないだろうがっ！

「役目が終わつたというのが、騙りかもしれないだろう。地道に探すしかないな」

？俺が、氣落ちしたのに気がついたロリスは、励ますように言葉を続けた。

「何しろ、プティマしか使えないと思われていた神聖魔法をユーリスは仕える。神話は本当にあつたことを元にしたのかもしれない」

？確かに、何も無い所から嘘の話を語るのは難しい。似たような出来事があり、教訓として神話が出来上がった可能性だってある。

「ユーリスは、光の柱を上げられないのか？」

「光の柱つて具体的になんだよ？」

？ロリスは意地悪そうに笑つた。

「光の柱つて言えば、ロリスたちは何か想像できるものがあつたりしないのか？」

「子供に聴かせるものがたりに、根拠なんかあつてたまるか。仮に、ユーリスが光の柱をあげられたとしても、誰にも言わないだろうな」

「なんで？」

「プティマ神の再来とかいわれて、教会に幽閉されるからさ」

？神様と同じことができてしまったら、それは神様以外の何者でもない。話に聞く所の、教会の偉い人たちはだいぶ権力思考が高いみ

たいだ。そんな奴らが、神様と同じ力を持っている人間をどう扱うかなんて想像できる。できるだけ、自分達の手元に置き、都合のいい様に利用するのだ。

「邪魔になったら、それこそ「光の柱を上げて世界を渡った」と大衆に知らせればいい。こつそり殺してしまっても解らないだろう。」

「ま、教会の奴らが何も手だしできない様な状況に持込たら、本当のことを答えてくれるかもな」

「ということは、ロリスはユーリスが光の柱を上げることができると考えてるんだな」

「ロリスは、逡巡して「まあな」と短く答えた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3724n/>

ドラッヘ大陸譚訪顛末記

2011年4月3日07時08分発行